

を以つて攻めさせました。けれども、柳山の城は要害な城でありますので、早速とは攻め落すことは出来ずそのまゝ、日を送つてゐました。その中に加賀、越後の方から義貞に味方する者がどしどし集つてきて、高經の兵を追ひ散らしてしまひました。高經は柳山の圍を解いて自分の城の方へ引き上げようとしたが、義貞の追撃がはげしくて自分の本城にさへ入ることは出来ず、足羽といふ所の城へ逃げこんでしまひました。高經の敗けましたことは、今までの越前の様子をすつかりかへてしまひ、國中にある城の中、その七十三ヶ所までは義貞についてしまひました。

義貞は自分の勢のつよくなるにつれて、も一度京都へ出て尊氏を討たうと考へました。まづ比叡山のお坊さんたちに手紙を出して、同盟しようではないかといひますと、比叡山の方でもよろこんで承知しました。その中に陸奥の北畠顯家も上つて來ましたので、いよいよ越前を立て都に上らうと考へましたが、斯波高經を討ちとらなうで行くのは如何にも残念でたまりませんでした。そも、北國へ來るはじめから、義貞を苦しめたものはこの高經でありますから、どうしてもこの高經を討ち取つてそ

れから行きたいと思ひました。これは義貞の大きな誤でありまして、たうとうとしかへしのつかない事になつてしまひました。

その時分高經は黒丸城といふ城にゐましたので、義貞はこの城をとらうとしてその近所にある足羽の城を攻めました。とることは出来ませんでした。これは義貞の方で小敵と見て油断したからでありました。義貞はくやくしてたまりません。どうして高經を討取らなくてはならないと、三萬の兵を以つて又しても攻めかゝりました。高經の方はたつた三百人、高經も今度は討死と覺悟してゐました。

七月二日義貞はいよいよ高經を討取るつもりでまづ兵を七つにわけて、七つの城をせめさせましたが、どうした事か戦が思ふ様に行きません。わけて藤島の城を攻めてゐる方が危くなかりかけましたので、義貞は氣が氣でなく、僅か五十人ばかりの兵をつれて日の暮方から藤島の城の方を助けようと出かけました。その時黒丸の城の方からも、敵兵が三百人程藤島の城を助けに出てきますのと途中でびたりと出逢ひました。義貞はこの敵を對手に戦ひましたが、向ふはすつかり用意をしてをりますのに、義貞の

方は弓を持つてゐる兵も楯を持つてゐるものも居らず、たちまち苦戦になつてしまひました。その時運悪くも義貞の馬が矢にあたつて斃れました。義貞は片足を馬の下にしかれて起き上る事が出来ません。そこへどこからともなく、白羽の矢が一本飛んできて義貞の眉間にあたりました。この急所の痛手にこれは到底助からないと、自分から首をかき切つて泥の中にかくし、その上に重なつて死んでしまひました。年は三十八歳勇ましい死方でありましたが、どう考へても惜しい事でございます。鎌倉の討入からこの方、官軍にとつて一番大切な人で天皇も一番大事に思つてゐられ、この後もせねばならぬたくさんの仕事を持ちながら、この僅かの敵のために斃れてしまひました。藤島は今の福井市から三十町程の所でございます。今福井市の近くに藤島神社がございますが、これは義貞を祀つたお宮でございます。明治天皇は義貞に正成と同じ様に正一位をお贈りになりました。

義貞の戦死した後、義助、義治が残つて官軍のためにつくしました。その勢はあまり振はず、尊氏はその歳の八月に北朝の天子から、征夷大將軍のお許をいたゞい

て京都に幕府をひらきました。

- 一 尊氏が京都に入つて、天皇はまた比叡山に行幸なされた。官軍は京都をとりかへさうとして名和長年等はそれのため戦死をした。
- 二 尊氏は京都へ入つて賊の名をさけようと豊仁親王を天皇と申し上げた。
- 三 尊氏は神器を御わたりしていたゞくために、後醍醐天皇に京都へおかへりを願つた。
- 四 天皇は京都におかへりにならうとされる時、皇太子恒良親王を義貞におあづけになつた。
- 五 天皇は一旦京都へおかへりになつたが、やがて吉野へおいでになつて行宮をそこにつくられた。
- 六 義貞は越前へ行つて金ヶ崎の島によつた。
- 七 金ヶ崎の城が賊のために陥つた時、皇子尊良親王は自殺をなされた。
- 八 義貞はその後柳山に旗あげしたが、藤島の戦になうとう戦死してしまつた。

第二十五 北畠親房と楠木正行

一 石津の露

陸奥の國司北畠顯家は元弘三年正月に足利尊氏の後を追ふて西に上り尊氏を西國へ追ひ落しました手柄によりまして、鎮守府將軍に任せられ、まもなく又陸奥に下りて靈山城（伊達郡）にをりました。ところがその翌年尊氏は九州から都に攻め上つて來て天皇を花山院におしこめ奉り、まもなく金ヶ崎の城も落ちましたので、今まで顯家についてゐた武士たちも一人二人とどこかへ行つてしまつて、勢はまことに少くな

つてしまひました。あてにならないのは人の心でございませう。こんな有様でありますから、天皇が吉野においでになり、義貞が柚山に旗あげたといふ事が聞えますと、いんのまにかまた兵隊がよつてきました。そこで顯家ほも一度都に攻め上らうと四方へ手紙を出して兵を集めました。その時馳せ集つた兵が三萬人にもなりました。そこで白河の關を西へ出しましたが、もうその時には十萬人にもなつてゐました。この白河の關を越えました時は八月の十九日。その事が鎌倉に聞えますと、鎌倉の管領足利義詮は八萬の兵を出して、それを利根川に防ぎましたが、顯家はこれを討ち破つて武藏國まで進んできました。すると、東國八ヶ國の武士は、又争つて顯家についてきました。ここで顯家はまづ鎌倉を取つてしまひたいと考へました。

この時、北條高時の子の時行も南朝について伊豆の國に兵を擧げて、顯家と協同して鎌倉を攻めようといつてきました。すると又新田義貞の次男の徳壽丸も上野國から二萬あまりの兵をつれて顯家と一緒に鎌倉を討たうと、武藏國に出てきました。

さあ鎌倉は大變でございませう、そこで大將義詮の前に大勢の大名たちがよつて相談

をいたしました。その時大名たちは、

「この様に大勢の者に攻められては到底勝つ見込みはない。ここは一旦安房か上總の方へ行つて、改めて戦の方法をきめようではないか。」
と、相談をきめました。その時大將の義詮はまだ十一歳でありましたが、それをききますと、

「その様に恐れてゐては戦は出来ない。私は鎌倉の管領としてここにゐる以上戦もしないで逃げることは出来ない。とも角も敵と戦つて、もしかたはない時には討死と覺悟をきめ、一方を斬り破ることが出来ればその時は安房へなりと、上總へなりとのがれて、そこで兵を集めて、顯家等が西へ上るあとから攻め上つて宇治か勢多の邊でお父さんの軍と狭み討にすればきつと勝つにちがひない。」
と、いひました。大人の大名たちもその言葉にはげまされて、ここで顯家等を迎へ討つことにしました。いよいよ十二月の二十八日に顯家、時行、徳壽丸の聯合軍は、一時に鎌倉を攻めてきました。鎌倉の兵はみんなで一萬人位ありましたが、たちまち敗

けてしまつて、義詮は鎌倉を逃げ出してしまひました。

この戦で又顯家につく武士がたくさん出来てきました。顯家等は、正月の八日に鎌倉を立つて西に向ひました。その勢は五十萬人であつたといひます。やがて尾張國まで来ました。するとその後から鎌倉の兵が八萬人程追ひかけてきました。ほんとに蟻螂が蟬をとらうとして向ふあとから小鳥がまたその蟻螂を食べようとして向つてゐるのと同じ様な有様でございます。

尾張まで来た顯家は、この後から来る鎌倉勢をうるさい事に思ひまして、三里程あつとへ退つて美濃と尾張との間で討ちまかしてしまはうと思ひましたが、この八萬の鎌倉勢は案外に強く、わけて青野ヶ原といふ所では顯家とその弟の顯信との兵が桃井土岐などといふ侍のために大分なやまされました。けれども兎も角も追ひ散らして西へ向はうとしましたが、その時尊氏は高師泰兄弟を大將として近江と美濃の境まで兵を送つてこれを防がうとしましたので、顯家はそれに相手にはならず、伊勢をまはつて吉野をさして進みました。

すると尊氏の方では、

『何だ強さうにしてゐるが、戦が恐ろしくて逃げてしまつたな。』
と、悪口をいつてゐました。

顯家が奈良まが行つた時でした。結城入道といふ者が顯家の前に出まして、

『折角ここまで來ましたが、青野ヶ原でも立派な勝利ともいへませず、師泰の軍も破らずにこのまゝ吉野へ行きます。』とは何となく恥しい様に思ひます。ついでにはこれから京へ上りまして、尊氏を追ひ落しますか、それが出來ねば花々しく戦つて討死いたしますのが武士の道かと思ひます。』

と、いひましたので、顯家も成程それにちがひないと、そこから京へ攻め上らうといひました。

さあ京都の方では誰が、顯家の軍を防ぎに行くかについて、相談いたしました。顯家の軍があまり強さうなので、顯家を『だめだ』などと悪口をいつてゐる者でも、いざとなると誰一人行かうといふものはありません。すると、

『それは桃井の兄弟が一番よい。桃井兄弟は美濃の青野ヶ原でも顯家を苦めたのだから。』

と、いふ者がありまして、桃井兄弟が出て行く事になりました。そこでこの兄弟は奈良をさして進んで行きました。顯家はこの兄弟を迎へて激しく戦ひましたが、顯家の兵は長い行軍にすつかり疲れてをりましたし、又侍たちは桃井兄弟の強いのに臆病風が吹いてゐましたので、もろくも敗けてしまひ、兵士はばらばらに散つてしまひ、大將の顯家さへもどこへ行つたかわからなくなつてしまひました。そして桃井兄弟は鼻高々と京都へ凱旋いたしました。

その中に顯家の弟の顯信は和泉の堺に行つて味方の兵を集め、京都の近くの男山に陣を張りました。この勢がまたなか／＼強さうなので、京都の方では足下に火のついた様に騒ぎ出しました。そこで、高師直が一族を率ゐて攻めに行きました。男山は八幡林のある山でありまして、山といつても小さい丘であります。下の方は崖になつてをりますので、なか／＼攻めにくい所でございます。まして顯信は一生懸命に

守つてゐるのですから、容易に攻め落すことは出来ません。そこで、師直は考へました。

『これを捨てておいては河内の邊で楠の者等が加勢してきては、それこそとりかへしがつかない。』

と、自分は大坂の天王寺の邊に陣を構えて顯家の軍と戦ひました。顯家は僅かな兵で命を惜まず戦ひましたが、運悪くも戦に負けて吉野の方へ逃げて行きました。けれどもつき従つてゐる兵士はたつた二十人ばかりでしたので、たうとう和泉の石津といふ所で戦死をいたしました。これが五月の二十日の事であります。その時顯家はまだ二十一歳の花はぶかしい若武者でありました。天皇はこの事をおききになると、大變お惜しみになつて従一位右大臣を贈られました。今大坂の南の方にある阿部野神社や福島縣伊達郡にある靈山神社は顯家や、その父の親房を祀つたお社であります。

男山の方はどうなつたかといひますと、やつぱり堅く守つて陥りません。この時のことでございます、義貞は延暦寺と同盟して京都を攻めようとしたのであります。で

すから尊氏の方では早くこの男山を落してしまはねば大變だと思つて、男山のお宮に火をつけました。男山八幡は皇室でも大切にされてをられるお宮でありますから、まさか火はつけまいと顯信の方も安心してゐたのであります。かうなりましたは兵は散らばつてしまひ、兵糧は焼かれてしまひ、六月二十七日の晩河内の方へ逃げて行つてしまひました。この時義貞が足羽の城なんかを攻めず、あの大兵を持つて京都へ來たなれば、顯家も戦死せず、男山も陥らず、或は尊氏が滅んでしまつたのかも知れませんでした。が、何でも物は、思ふ通りには行かないものであります。

官軍は總崩れにくづれてしまひました。大將たちは討死してしまひました。南朝にとりましては悲しい事でございます。天皇はどこまでも足利氏を亡ぼしたいとお思召され、も一度東國の兵をお集めになりたいと、今年七歳におなりになつた、義親王を顯信におあづけになつて陸奥にお下しになりました。父の親房もやつぱりその供をすることになりました。顯信等は伊勢から船にのりまして陸奥に下りましたがその途中遠江灘で颶風に出逢ひ、船は風のまにまにばらばらになり、親王の船は伊勢

にふきもどされ、そこから吉野におかへりになりました。親房は常陸につき神宮寺といふ城にはいりましたが、賊のために攻められて、阿波崎城に入りましたが、ここも賊に落され、こんどは小田城に入りましたが、ここも賊に落されて、關城に入りました。關城は常陸國眞壁郡河内村にあつたのであります。この城には關宗祐といふ武士がゐまして親房を大切に守つてくれました。けれどもこの時分この近所の城はみんな足利の方の城ばかりでありまして、この關の城と、隣の大寶城とだけが天皇のために味方してゐたのであります。ですからこの二つの城はいつも敵にせめられて少しも安心がしてゐられませんでした。

親房はこの戦争中にあつて『神皇正統記』といふ本を著しました。古く神代の事から後村上天皇の時まで、天皇の御血統の事をくはしく書いてあるのであります。今まで歴史を研究する人はこの本をしらべない人はありません。後になつて吉野の方から天皇の御孫尊良親王様の皇子守永親王もこの城においでになりましたが、高師冬が大兵を以つてこの城をかこみ、城中では兵糧もなく、又助け

てくれる者もなくたうとう城は陥つてしまひました。その時、親王と親房とはやつと城からのがれ出ることが出来ました。それから親王は陸奥にお下りになり、親房は吉野へ上つて行きました。其後親房は死ぬるまで南朝に仕へていつも天皇をお助けいたしました。この親房父子も、楠木父子と同じく日本の忠臣として、いつまでも人の鑑として仰かれるのであります。

後醍醐天皇は延元三年八月十六日に吉野におかかれになり、義良親王が御位におつきになりました。これを後村上天皇を申し上げます。

二 吉野の宮

延元元年十月二十八日後醍醐天皇はひそかに花山院をおのがれになつて三種神器を奉じて吉野へおいでになりました。まづ賀名生といふ所の堀信増といふ者の家を行宮とおさだめになりました。賀名生は大和國吉野郡賀名生村にありまして、もと穴生といつた所でありまして、吉野から五里程の所であります。その年の十二月に吉野にお遷り

になりましたが、正平四年正月に高師直、師泰が吉野を攻めましたので、後村上天皇はまた賀名生にお移りになりました。

それから五十八年の間幾度もここが宮となつたのであります。

延元元年十二月、後醍醐天皇は賀名生から吉野の吉水院におうつりになりましたが、延元三年八月九日から天皇はご病氣におかゝりになりました。山の中の事でございますから、何かにつけて不便でありましたが、お側の人たちは出来るだけの御看護を申し上げます。その十六日天皇は俄かに御枕を擡げなされて、

『朝敵を滅ぼし、天下を平ぐることが出来ないのは如何にも残念である。たとへ身は吉野の土に埋れやうとも、心はいつまでも京都の空をはなれることはあるまい。みんなは力を費せて是非とも朝敵を討ち滅ぼしてくれよ。この命令に背くものは朕の子孫でもなけねば、朕の臣民でもない。』

と、はつきりとお告げになつて、右の手で御剣をお按でになつたまゝ、まもなく崩御になりました。御遺骸は吉野山の麓、如意輪堂の後の方に葬り奉りました。塔尾の陵

と申し上げます。

花に寝てよしやよしの、よし水の

まくらの下に岩ばしるおと。

ここにも雲井の櫻咲きにけり

ただかりそめの宿と思ふに。

言問はん人さへ稀れになりけり

わが世の末ぞ思ひやらるる。

都だにさびしかりしを雲はれぬ

吉野の奥のさみだれの空。

などの御製はみんなこの御宮でおつくりになつたのであります。

三四條 巖の嵐

櫻井驛から父の正成にわかれて河内の國へかへりました正行は、お母様にもお父様のお話を話し、淋しい中に戦の様子はどうかと心配してをりました。

はたして正成は湊川に戦死しましたが、尊氏は敵ながらも、立派な大將の首でありますから、これを河内へ送りました。お母様も正行も、前からかうなることゝは承知してをりましたが、さてその首を見ますと、悲しさが一時にこみあげてきまして、たゞ袖を顔にあて、泣きたいだけ泣きました。涙がいつ止むのかもわかりませんでした。

正行はその時何を思ひましたか、流るゝ涙を袖におさへて持佛堂の方へ行きました。お母様は不思議に思ひましてそのあとからついて行つて戸の間からのぞきますと、正行はお父様から形見にいたゝいた菊水の刀を右の手に抜き持つて、袴の腰を押しさげ今にも腹を切らうとしてゐました。お母様は急いでかけよつて、正行の腕を押へて、

涙ながらに申しますには

「何をなさるのです。梅樹は二葉の時から芳しいといひます。あなたは小さくてもお父様の子であればこれ程の事がわからない事はありません。お父様が湊川へおいでの時、あなたを櫻井からおかへしになつたのは何のためでしたか。お家へかへつて腹を切れとのためでしたか。お父さんがおなくなりになつても、死に残つた一族をあつめて軍をおこし、天皇様のおためにおつくしするためであつたのではありませんか。その事はこのお母様よりも、あなたの方がよくお知りのお筈です。それをもうお忘れになりましたか。そんな事で、天皇様のお役に立つことが出来ますか。」

と、いひきかせました。これをききますと、正行もその通りなのですから何ともお返事が出来ません、お母様と二人が抱きあつてよよと泣きました。

それからの正行は、いつもお父様と、お母様とのお訓を忘れず、ふだん遊びますにも尊氏を討つ真似をして大きくなるのを待つてゐました。

お父様の死なれてから十三年たちました。正行は二十三の血氣盛りになりました。

お父さんの志をついで尊氏を滅ぼす時がきたのであります。正行は忠義の旗を金剛山の畔にたてました。河内、和泉の兵士たちは五百人も集つてきました。正行はそれから紀伊や攝津を味方につけて、その勢はだん／＼と盛になつてきました。尊氏はこれをききますと、

「正成の子なれば何とかするだらうと思つてゐるが、恐れる程でもあるまい。しかし近所の奴が又騒ぎ出してこまる。今の中に討ち取つてしまへ。」

と、細川顯氏に三千程の兵を率ゐさせて征伐に出しました。正平三年八月顯氏は進んで河内の藤井寺まで行きました。こゝは金剛山から七里程の所でございます。この時正行は矢尾といふ所の城を攻めようとしてゐました。顯氏がその事をききますと、

「よし／＼矢尾へ行つた留守の中に、急に金剛山を攻めてその城をとつてしまつてやれ。」

と、様子をうかがつてゐました。正行はまたお父さんの子で戦はなか／＼うまいのですから、

「顯氏は私の留守をねらつてゐるな。一つその計略の裏をかいてやれ。」

と、自分から七百人程の兵隊を率ゐて、矢尾をさして進み、わざとその邊の民家に火をつけて、その間にこつそりと後もどりして、譽田林といふ所にかくれてゐました。そんな事とは知らない顯氏は、矢尾の方に火のあがるのを見まして、

「たうとう矢尾へ行つたな。それ金剛山をさして進め。」

と、兵を急がせて、譽田河原まできますと、たちまち後の方から呐喊の聲が起つてきました。ハテ不思議と後を見ますと、林の中から菊水の旗がサツと風に翻つてをります。

「それあとに返せ。」

と、急に備へを立て直さうとしましたが、もうその時は正行が先登となつて、突撃してきましたので、何とすることも出来ず、京都をさして逃げて歸つてしまひました。

この藤井寺の戦で正行が僅かな兵を以つて、數倍の敵を破つたので、正行の勢はたちまち近畿の間に振ふてきました。そして一月とすぎ、二月と經つ間に正行の兵

は次第に多くなつてきました。そこで尊氏もそろ／＼恐ろしくなつてきました。そこで今度は十一月の二十五日に山々時氏、細川顯氏の二人を大將としまして、六千人の兵を連れさして正行征伐に出かけさせました。顯氏の方はこの間敗けたのでございませうから、

『今度まけたら人にあはす顔はないぞ、死ぬる覺悟で夏の恥をとりかへせ。』

と、兵士を勵ましながら進んできました。

二人は通んで攝津國に行つて、時氏は住吉に、顯氏は天王寺に陣をかまへました。

正行はその二十六日に金剛山の城を出て、二千の兵を率ゐて、攝津にきました。

『よし／＼、先づ住吉の敵を討つてしまへば、天王寺の敵はきつと逃げるにちがひない。』

と、瓜生野の北から進んで行きました。時氏は正行の進んで來るのを見ますと、まづ兵を三つにわけて、自分はその中の一隊の長となつて瓜生野の東に進んで行きました。顯氏はやはり天王寺に陣してをります。

それまでは正行の方も兵隊を五つにわけて進んでゐましたが、敵が四つにわかれてゐるのを見ますと、

『こちらは一つになつて進め。』

と、猛然として瓜生野を進んで時氏にぶつかつて行きました。たちまち正行と時氏とは激戦となりました。斬り合ひ、組み合が一時間程もつづきましたが、もうその時には時氏は七ヶ所も創を負ふてゐました。兩軍は火の出る程戦ひましたので、どちらとも疲れて右左に引き分れてしまひました。

この時正行の軍から和田源秀、安間了願といふ二人の坊さんが、進み出まして、時氏の軍に斬りこんできました。二人は中々つよく、見てゐる中に三十六人の首を斬つてしまひましたので、時氏の方もそのまゝにして置くことは出來ず、二人を討ち取つてしまへと、進んできましたので、正行の方も二人を討たすなど、又激戦がはじまりました。そして又も時氏は散々にまけました、そこで時氏は腹を切らうとしましたが、その家來が無理にそれを止めて、京都をさして逃げ歸りましたので、顯氏の方もろく

ざま戦もしないで逃げ出してしまひました。

この時一度に大勢が逃げ出しましたので、渡邊橋から河に落ちたものが五百人もありましたが、けれども誰もそれを助けようとするものはございませぬ、親は子を捨て、子は親を捨て、逃げてしまひました。かあいさうに冬の最中に重い鎧を着て河へ落ちた京都の兵隊たちは、今にも凍えて死にさうになつてをります。戦には強いが、又情深い正行はそれ等の兵をすつかり助けて、あたゝかい着物まで着かへさせ、傷を負ふてゐる者には醫者をつけ、薬をやつて五六日も親切に世話をして、歸してやりました。

敵の中にはこの親切が嬉しく、歸らないでそのまゝ正行についてしまつたものも大勢あつたといふ事であります。

時氏、顯氏がまたも逃げ歸つてきましたので、尊氏はすつかり腹を立て、

『この上はみなごろしにしてやるぞ。』

と、高師直、直泰を大將に、四國、中國、東山、東海の兵六萬を遣して正行を攻め

せました。

これをきいた正行は、

『こんどこそ死ぬるか生きるかの境である。せめては一度天皇の御顔を拜してから行きたい。』

と、十二月の二十七日に弟正時以下一族の者をつれて、吉野の皇居にまゐつて、天皇に申しあげました。

『私の父正成はかよわい身をもちまして、高時の軍と戦ひ、一たびは先帝のお心をお休めすることが出来ましたが、その後又も尊氏のために世は亂され、とう／＼湊川に戦死をいたしました。その時私は十一歳でありましたが、父は合戦の場へはつれて行きませぬ、成長したなれば朝敵を討つ様にと私を河内へ歸へしましたのでございませぬ。幸に私も成長をいたしました。が、もしも陛下にお盡しもいたしませぬ、病氣のために死ぬ様な事がありました。陛下に對しては不忠な臣となり、父に對しては不孝な子となりはしないかいつも心配をいたしてをりました。ききますれば今度

高師直兄弟が大兵を以つて私を攻めて來るといふ事でございます。その時こそ一命を捧げて陛下にお盡しする時かと存じます。もし私が師直の首をとることが出来ませぬば、私の首を彼に取らせようと存じます、この死を覺悟いたしましたからには一度陛下のお顔を拜させていたただきたいと、只今参内仕つたのでございます。と、誠を面にあらはしてお頼みいたしました。その時後村上天皇は御簾を高くおまき上げさせになつて、しづかに正行一族をご覽になつて、近く正行をお招きになり、『此の間から二度も賊を破つたことをきいて、朕は大變によるこんでをります。父子二代も心をかへずに盡してくれることは大層感心に思つてをります、今賊が大兵を以つて攻めて來るといふ事は、朕も心配に思つてをりますが、死ぬばかりが忠義ではない、朕はお前一人をたよりに思つてをります。どうか命を大切に、この後とも力を盡して下さい。』

と、お言葉やさしくおたのみになりました。正行はあまりの有難さに嬉し涙がとまりません。ヒタと頭を地につけてお禮を申し上げました。

正行は皇居を下りますと、すぐ後醍醐天皇の御陵におまわりをいたしました。それから如意輪堂に行きまして、一族百四十三人の名を過去帳にかきました。そして箭鏃をもつて堂の扉に、

かへらじとかねて思へば梓弓

なきかすに入る名をぞとどむる。

と、辭世の歌をかい、めい／＼の髪をきつて佛殿に納め、その日吉野を立つて戰場へ向ひました。

師直兄弟は、正行が吉野から歸つてきたとききますと、弟の師泰は二萬人を率ゐて、正月の二日に和泉の堺まで進んできました、その六日には、師直が六萬の大軍を率ゐて河内の四條につきました。天皇は四條隆資にお命じになつて正行を助けさせになりました。この時正行は三千の兵を率ゐて師直の軍に突進して行きました。たと

へ兵は少くとも、正行はじめ死ぬる覺悟の兵は見てゐる中に師直の軍の一陣を突き破つてしまひました、師直の方もここを先途と戦ひましたので正行の後軍が半分ばかりも討たれてしまひ、半分ばかりは逃げてしまひました。

正行、正時、源秀、正朝など一族百四十三人等はみんな前軍にをりました。後軍が破れてもすこしも元氣を落さず、殘兵三百人を率ゐてまっ直ぐに師直めがけて進んで行きました、細川清氏は五百人の兵でこれを防ぎましたがたちまち破られてしまひました。次は仁木頼章が七百人でかかつてきました。正行は馬の轡をならべてそれも斬りまくつてしまひました。するとこんどは千葉、宇都宮などの大將が五百人で東西から一時に正行に迫つてきました、正行は息もつかずにこれと戦つて二人を追ひのけましたが、それがため、正行の兵も百人あまり討たれてしまひ、馬までが傷を負ひました。そこでみんなは馬からおりて徒歩となりました。そしてめい／＼田の畔に腰をかけてお晝のお辨當を喰へはじめました。この様子をながめました師直の兵はあきれしまひました。

「何といふ落ちついた大膽なものだ、あの様子では死ぬるまで進んで来るぞ。」
と、こはがつて誰一人寄りついて来るものはありません。泰然としてご飯をたべてしまつた正行は、

「さあ、師直はどこだ。いよ／＼勝負だ。」

と、立ち上りました。師直の兵は七千人正行をとりかこんできました。けれども正行はびくともしません。矢を射かけられ、ば鎧の袖をかき合せてこれを防ぎ、敵が近づて来れば太刀を揃へて斬つてかかります。正行は師直の陣までもう二三十間といふ所まで近づいて行きました。

師直の陣では「よもやここまで来まい。」と思つてゐたのでありますから、それ刀それ槍だ、と騒ぎ出しました。この時師直の陣に上山高元といふ者がをりました。正行がそこまで来たとききますと、にはかに師直の鎧を取つてイキナリ自分の肩にかけ飛び出さうとしました、すると師直の家來が、

「コレ／＼それは大將の鎧だ。」

と、引きもどさうとしました、師直はハツタとその家來を睨めつけて、

『何をいふのだ、今大將の命に代つて戦はうとする勇士に、千兩萬兩の鎧でも何が惜しからう、そごどけ。』

と、叱りつけました。上山はこれを聞くと、よろこんで師直の前に立ちふさがつて、

『俺が高武藏守師直だ。』

と、矢庭に正行の兵を五人ばかり斬り倒しました、正行の方では『それ師直だ。』とよつてたかつて高元を殪してしまひました。

正行はその首を見ますと、大將らしい顔をしてゐますし、その鎧も輪違ひになつた師直の紋がついてをりますので、

『嬉しや、これで望は達した。』

と、よろこんでゐます時、弟の正時が飛んで来て

『ほんとの師直の首でございますか、まづ敵味方にみせてごらんなさい。』
と、いひますので、正行はそれをみなにみせますと、一人の者が

『それは上山高元の首でございます。』

と、いひますので、正行はその首を地に投げつけ、

『さても日本一の不都合な奴だ。』

と、ボンと足で蹴りましたが、又拾ひとつて、

『けれどもお前も主人のためには忠義者だ。』

と、その首をそこに置いて、

『師直はどこか。』

と、あたりを見まはしました。すると向ふに師直の旗がみえます、正行は残つてゐる五十人の兵を率ゐて向もはげしく進んで行きましたが朝から六時間程も奮戦をつづけましたので誰も彼もからだは綿の様に疲れてしまひました。正行は刀を杖にしなから暫くやすんでゐましたが、又一丁程前に師直が出て來たのをみますと、

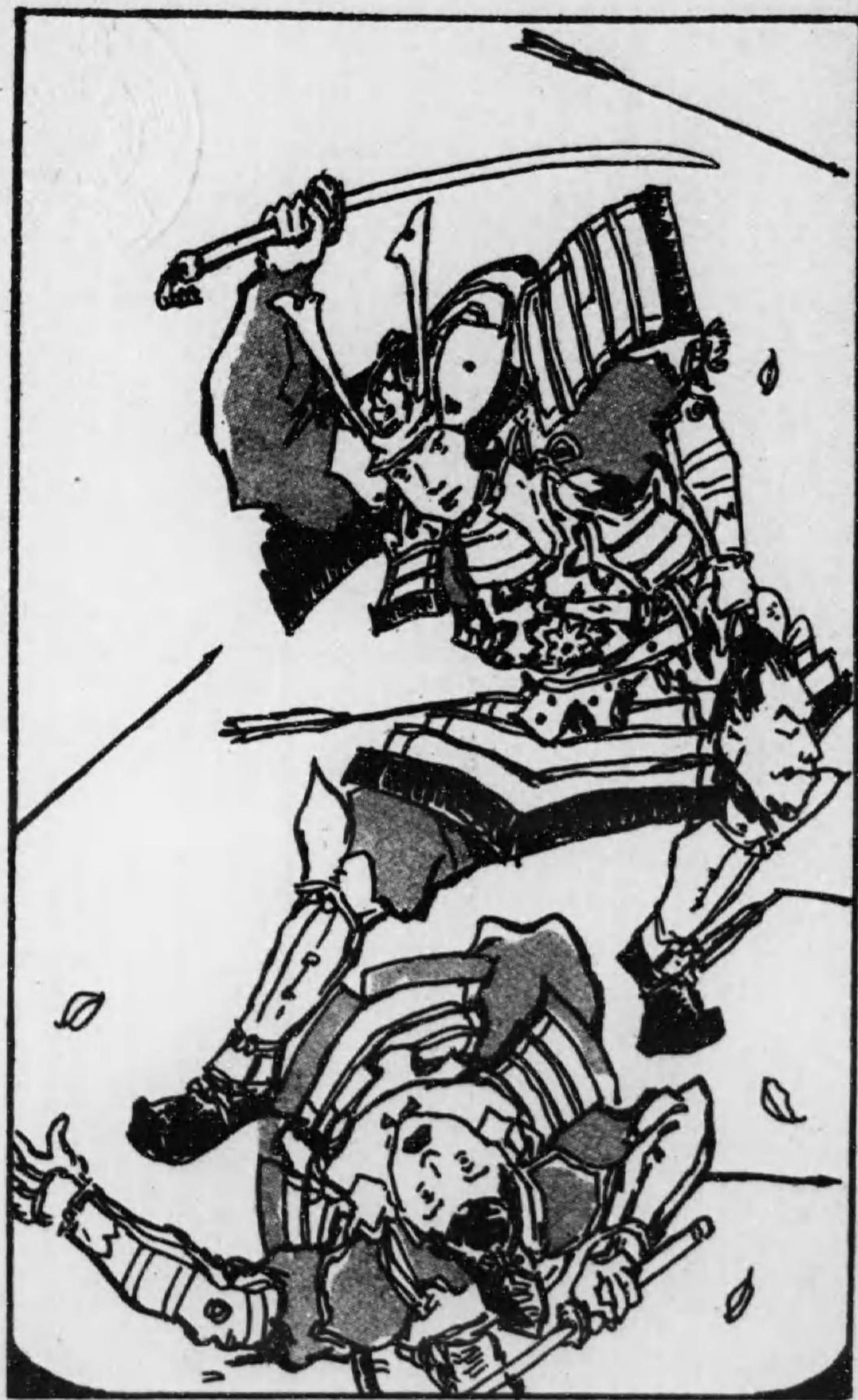
『討てない事があるものか。』

と、飛びかゝつて行きました。師直はびつくりして逃げ出しました。その時須々木四

郎といふ者が、弓でもつて射かけましたので、その矢が正時の眉間にあたりました。正時も左と右との膝口右の頬、左の目先を射られて動けなくなつてしまいました。どんなに心ばかりがしつかりとしてゐても、これでは何とすることも出来ません。これが最後と、正行正時の兄弟は刺し違へて死んでしまひました。残つてゐた三十二人の兵士も我も々々と、腹掻き切つてともに戦死をとげました。

日はもう暮れかゝつてきました。雲はひくく、風は冷めたく一世の忠臣孝子の靈は悲しく天に歸つてしまひました。その時正行は二十三歳でありました。

今も正行の墓は、この戦死の場所に残つてをります。墓の東九町程の所には正行を祀つた別格官幣社四條畷神社がたつてをります。明治三十年、明治天皇はこの正行に従二位をお贈りになりました。大正三年には正時は、正四位を贈られました。



行 正 備

- 一 北畠顯家は京都をとりかへさうと又兵を率ゐて京都へ上つてきたが、都へ入ることが出来ず、和泉に戦死をした。
- 二 顯家の戦死した後、顯家の父親房は皇子義良親王を奉じて陸奥へ下つたが途中大風にあつて、親王の船は伊勢に吹きもどされ、やがて吉野におかへりになつた。
- 三 後醍醐天皇の御かくれになつた後、義良親王が御位をおつぎになりました。これを後村上天皇と申し上げる。
- 四 親房はその後常陸の關川にあつて神皇正統記といふ本をあらはした。
- 五 楠木正行は成長の後南朝につかへていく度も戦の手柄をてた。その後高師直が大兵を率ゐて攻めてきたので、正行は河内の四條畷で大いにこれと戦つてたうとう戦死をした。

第二十六 菊池武光

一 征西將軍

後醍醐天皇が北條氏討伐をおはじめになつたははじめから遠い九州の地にあつて、いつも天皇のためにお盡したの菊池氏でありました。

菊池氏は藤原氏から出て、その子孫はながく肥後國にをりました。弘安の役には菊池武房が一族を率ゐて従軍しました。その孫の武時は後醍醐天皇が隠岐からお遁れになつた時九州探題北條英時を攻めて勇ましく戦死をいたしましたことは前にもお話を

いたしました。その時武時は子の武重を國にかへして、

『よく私の志をついで天皇の御爲めにつくせ。』

と、いひきかせました。武重はその後京都に上つて義貞と共に尊氏を鎌倉に攻めました。尊氏が九州へ逃げてきた時には、武重の弟の武敏が多々良濱に尊氏をせめて武名をあげました。その後武重は天皇にお願ひをして、

『私は長い間九州で戦つてをりますが、まだどうも御威光が一般に及びません。どうぞ宮様をお一人九州へお下し下さいませすれば九州の者もきつと御味方につくでございませう。』

と、申し上げました。そこで後村上天皇は御弟懷良親王を征西將軍として九州へお下しになりました。武重はよろこんで、肥後國八代郡に征西府を立ててお守護いたしました。

その後武重が死にまして、弟の武光が家をついで、親王をお輔翼いたしました。

二 筑後川の戦

その時分九州の豊後に大友氏時といふものがあり、筑前に少貳頼尙といふ者がありました。この二人の者は長い間菊池氏と争つてをりました。けれども武光は戦の上手な人でありましたので、この二人のものもたうとう降参してしまひました。

九州は大方親王の味方につきましましたが、ただ一人畠山國久といふ者が日向國にゐて降参をいたしません。そこで武光は國久を征伐しようといふ者が日向國にゐる時と、頼尙とがまた叛きました。武光はまた兵を率ゐて豊後から筑前を攻めまはりまして、大いに氏時、頼尙を敗りましたが、まだ降参をいたしません。そこで懷良親王はご自身大將となられて頼尙を征伐にお出かけになりました。武光は八千の兵を率ゐてお供いたしました。

これを聞いた頼尙は六萬の大軍を率ゐて、筑後川に陣を張りました。正平十三年の七月でした。武光は五千餘人の兵を率ゐて筑後川を渡り頼尙の陣へ押し寄せました。

ところが頼尙は何と考へてか戦はうとはいはせません。三十町も後の方へ退いて、大保原といふ所に陣をうつしました。武光も續いて攻めて行かうとしましたが、その間には泥深い沼がありました、そのまん中に細道が一條通つてゐるばかりであります。しかもその道さへ三ヶ所も堀切つて、細い橋がかけてあるばかりで軍を進めるわけには行きません。仕方なく二十日あまりも向ひあつてゐました。敵を眼の前にして戦ふことが出来ないのですから武光はぢれつたくてたまりません。そこで一つ敵に恥をかゝしてやれ、と、金銀で日月を打ちつけてある旗のさきに、一枚の紙をはりつけました。この紙は前に頼尙が一色といふ者に攻められて、到底助らなくなつた時、菊池の者が頼尙を助けてやつた事があります。その時頼尙は大變よろこんで、

『今から後子孫七代の間は菊池に向つては決して戦争をしない。』

と、いふ約束の文句を熊野のお札の裏に血でもつて證文を書いてそれを菊池の方へさしました。それに今心を變へて菊池と戦つてゐるのであります。そこで武光は、『どうだ、この約束を忘れたのか。』

と、今旗の先へその證文をばり出したのであります。けれども頼尙の方はそ知らぬ顔で控えてをります。武光もこの上は睨めつこもしてをられず、十六日の夜三百人の兵を敵の後の方へまはらせ自分は七千人の兵を三つにわけて、筑後川に沿ふて嶮岨な道を通り、筑後川の水が囂々と鳴りひびく音にまぎらして進みました。やがて頼尙の後へまはつた一隊が攻めこみました。狭い所へ六萬の大軍が控えてをりますので、僅か三百人に攻め入れられますと、どれが敵やら味方やら少しもわかりません。頼尙の軍は同志討をはじめました。この騒ぎの中に夜があげました。武光の第一陣が例の證文をばりつけた旗をまつ先に立てて正面から攻めこんで行きました。ついで第二陣が突きこんで行きました。

武光は頼尙はどこかと眺めますと、はるか向ふに二萬餘の兵を控えて堂々と構えてをります。武光は、

「それ、アレを撃ち破れ。」

と、三千人の兵を提げて突進いたしました。頼尙もサツト右左に兵をひらひいて矢先

をそろへて一齊に射かけてきました。矢は飛んで雨の様でございませす。武光は事ともせずその中を進みました。

懐良親王は大層勇ましい方でありまして、この亂れ飛ぶ矢の中を進まれました。たちまち一本の矢が親王にあたりました。親王は少しもお弱りでなく進まれます。二本目の矢がまたあたりました。親王はそれでもお進みになりました。三本目の矢がまたあたりました、親王はますます勇氣をお出しになつて馬を進められます。親王のおからはだはだん／＼あぶなくなつてきました。

この時親王におつきしてゐました十一人の公卿の人たちと、又はる／＼九州まできてゐた新田の者たち一千人とが横から敵陣を衝きました。けれども頼尙の軍はそれを迎へて烈しく戦ひましたので、お公卿さんの兵も負れば、新田の軍も散々に破られてしまひました。武光は火の様に怒つて、無二無三に敵を衝いて行きました。馬が倒れば乗り替へて、懸入り／＼十七度まで戦ひました。その間に武光は冑を打ち落されて、小鬘を二太刀も切りつけられました。

『それ大將があぶない。』

と、思つてをります所へ、又も敵の中から一人の勇士が出てきまして、武光に討つてかゝつてきました。武光は馬の上からその者に組みついて、難なくその首を斬り、自分はその者の冑を取つてそれをかむり、馬までその者の馬に乗りかへて、尙も進んで敵と戦ひました。

その日武光の軍は朝の六時頃から、午後の六時頃まで息もつがずに戦つて、敵の首をとつたことが四千。頼尙もこれは叶はないと思つて、太宰府へ引き上げてしまひました。武光も戦には勝ちましたが、味方の討死したものを數へますと、千八百人もありました。そこで一度國へかへらうと、肥後國へ歸りました。これを筑後川の戦といひます。

その後、頼尙、氏時は、やはり筑前、豊後にをりまして降参をいたしません。そこでこの筑後川の戦から二年程後武光は兵五千餘を率ゐて筑前博多にまで進んで行き、すると頼尙、氏時の二人は兵隊を一緒にして香椎の邊に陣を構えて武光をう

たうとしました。その兵は一萬三千人もありました。そこへ松浦といふものまでが、三千の兵をつれて頼尙等を助けにきました。武光はちつとも恐れず、親王を奉じて烈しくこれと戦ひ、たうとうまづ松浦の者らを走らし、つゞいて二人も追ひまくつてしまひました。

もうこの時は尊氏が死んで子の義詮の代になつてゐました。義詮は九州の様子をききますと、これは捨て置くことは出来ない。と、斯波氏經といふものを九州の探題として菊池征伐に向はせました。大友氏はよろこんでこれを迎へました。

武光は斯波氏經の來たことをききますと、親王に申し上げて、

『敵の兵が多くならない中に打ちとつてしまひませう。』

と、弟の武義等を大将として、五千人の兵を遣して氏經を討ちにやらせました。氏經の方も七千人の兵を途中まで出してこれを防がせましたが、武義等は勇敢に戦つて氏經の軍を追ひ拂つてしまひました。武光は味方の勝た事をききますと、

『それでは探題もついでに追拂つてやれ。』

と、自分から三千人の兵を率ゐて筑前にまで行き、弟の武義と一緒になつて、豊後の國に向つて行きました。

氏經、氏時は武光が攻めて來るといふ事をききますと、大いに恐れて高崎といふ城まで逃げてその中にはいました。この時頼尙も氏經について武光にむかひました。が、武光は一年あまりも城を圍んでたうとう氏經を京都に追ひ返してしまひました。

武光の死んだ後、子の武政がやはり懷良親王を奉じて南朝のためにつくしました。この時足利義滿は十萬人の兵を率ゐて菊池征伐に出できました。武政はこれに對してよく戦ひましたので、義滿もどうする事も出來ず、仲直りをして京都へかへりました。

その後征西府へは後村上天皇の皇子良成親王がおいでになつて將軍となられました。懷良親王は弘和三年におかくれになりました。親王が九州へお下りになつてから四十六年の間であります。

元中九年には南北朝が合一せられました。征西府にはやはり良成親王がおいでにな

つて九州をお鎮めになつていらつしやいました。その後應永四年に大友親世といふ者が征西府を陥れましたので親王は筑後の方へお逃げになり、やがてそこでおかくれになりました。征西府はこれで五十九年の間つゞいたのであります。

- 一 九州の菊池氏は代々勤王のために兵をあげた。
- 二 後村上天皇は九州の官軍のために御弟懷良親王を九州におつかはしになつた。
- 三 菊池武光は親王を奉じていつも九州の賊と戦つた。
- 四 その時分少貳頼尙はいつも親王にそむいたため武光は頼尙を筑後川の畔に討つて大いにこれを破つた。
- 五 武光の死んだ後九州の官軍はやらやく衰へた。

第二十七 足利氏の僭上

一 不忠の崇り

昔の言葉に『忠臣は孝子の門から出る。』といひます。又天下の太平は、兄弟の仲のよいのからはじまるといひます。このさかさまに天下を亂すほどの者は、きつとその家の中もよくないと見えます。はじめ尊氏が京都へ攻め上る時などは尊氏と弟の直義との仲はよかつた様であります、さて世の中が自分の物になりますと、お互に慾ばつたり、疑ひあつたりしてどうも仲がよくありません。

そこへ持つてきて高師直兄弟が四條畷に正行を討つてかへつてきてから後は、『自分らこそ足利の忠臣である。』

と、威張ります。みんなに威張るばかりでなく、直義にまで無禮をしますので、直義は師直を殺してしまはうとしました。尊氏はこの様子をみますと、師直兄弟もよくないと思ひましたが、何しろ師直等の勢がつよいものですから、それを抑へつけることが出来ず、今まで鎌倉に行つてをりました子の義詮を呼びもどして直義にかはつて政治をさせました。これがまた直義にとつてうれしい事ではありません。

『兄さんは師直兄弟をどうすることも出来ないのか。』
と、たうとう師直兄弟を殺してしまひました。そこで尊氏は直義の不平をなだめようとして、一旦義詮に與へた政治の権力を又直義に委せましたが、それでも直義の不平は納らず正平四年七月に直義は京都を出て鎌倉へ行つてしまひました。

この時直義の心で鎌倉は頼朝の幕府を置いた所である、ここで勢を張れば、兄の尊氏よりも自分の方が強くなるかも知れないと、考へたのでありました。尊氏も亦は

じめから鎌倉に幕府をひらきたかつたのでありますが南朝のあるために、仕方なく京都に幕府をひらいたのでありますから、直義の鎌倉行きは何より不安でございませぬ。もし直義が鎌倉にゐて自分よりも強くなつては、この何年かの間、朝敵といはれたのもかまはず戦つたり苦勞したことが何の役にも立たなくなりませぬ。そこで慾のため、野心のためには兄弟のなつかしみも何もかも忘れて、その翌年の二月にそつと人をやつて直義に毒をのませて殺してしまひました。まことに情ない事をしたものであります。護良親王を殺した罰は何年かたつて、その兄から報いられたのであります。

後村上天皇の正平十三年四月、尊氏は脊中に癪といふ腫物が出来ました。醫者よ、薬よと、さわぎしましたがなほりませぬ。神様よ祈禱よと騒ぎましたがやつぱりなほりませぬ。十日ばかり患つて死んでしまひました。その時年は五十四歳まだ若かつたのでありましたが、天皇をおくるしめ申し、忠義な人たちを殺したりした祟りであつたのかも知れませぬ。しかし尊氏も天皇に矢を引いたり、戦でたくさんの人を殺したことを悪いと思つてゐましたか、後醍醐天皇がおかくれになつた後、その御供養のため

めに、嵯峨に天龍寺といふ寺をたててお吊ひ申したり、敵味方の戦死者のために國々に安國寺といふお寺をたててお供養をしたのは、まあ感心な事でありました。

二 南北朝の合一

正平十三年尊氏のあとをついで子の義詮が征夷大將軍になりました。勿論北朝の天子から許された名でありまして、正式ではありません。それから九年たつて義詮は三十八歳でなくなりました。この間世の中はやはり騒がしく、いつ南朝の方から攻めて来るかもわからず、すこしも落付いた日があつたのであります。

そのあとを子の義満が継ぎました。その時義満はまだ十歳でありましたから、政治の事などは少しもわかりませぬ、そこで一族の細川頼之といふものがこれを輔けてゐました。頼之は立派な人でありましたので、氣をつけて義満を育て、侍たちにも奢をとどめ、悪い我儘な大名たちを抑へましたので足利氏の勢もどうやらしつかりとしたものになつて行きました。

その間吉野の朝廷では、後村上天皇が三十年御位にあつて、正平二十三年に後崩御になり、皇子後龜山天皇がお立ちになつていらつしやいました。

義満が將軍になつてから二十四年の後であります、使を吉野に出して、後龜山天皇に京都へお還幸をお願ひいたしました。後龜山天皇も長い間戦をしてゐることは、人民にとつてもさぞ難儀なことであらうとお察しになつて、義満の願ひをお許しになり、元中九年十月二十八日に神器を奉じて、吉野をご出發になつて、十月三日に京都へおつきになりました。その日嵯峨の大覺寺といふお寺にお入りになつて、二日の後位を北朝の御小松天皇にお譲りになりました。後醍醐天皇が吉野においでになつてからこれまで五十七年の間でありました。



義満は南北朝を合一してから、はじめて正當の將軍となりました。それと一緒に何事も思ふ通りになるものですから、そろ／＼我儘をはじめました。小さい時には細川頼之が厳しく育ててゐましたことは前にいつた通りであります。根が我儘ものですから、二十二歳になつた時、その監督をいやがり、その職をやめさしてしまひましたので、もうこの頃では誰もその我儘を止める者はありません。所々方々と遊んでまはつたり、榮耀榮華をしたり、奢れるだけ奢つて、後龜山天皇の天授四年には京都の室町といふ所に立派な御殿をつくり、その庭園には奇しい木や草花を植えて自分一人で樂しんでゐました。世間の人はそのご殿の事を花の御所といつてゐました。

南北朝を合一しました時は義満の三十五歳の時でありましたが、それから二年たつて將軍の職を子の義持に譲つて、自分は太政大臣にして下さいと天皇にお願ひいたしました。天皇はこれをお許しになりました。まもなく義満は太政大臣の役を辭して、お坊さんとなりました。その翌年——三十九歳の時でございませう。比叡山の延暦寺に参詣いたしました。その行列は上皇様の御行の儀式と同じ様にして關白以下の公卿

にお供をさせて、それは盛なるものでありました。臣下として上皇の御眞似をするなどとは僭上この上もない事でありませう。しかし義満の我儘、奢はこれにて止まつたわけではありません。應永四年に歳が四十歳になつた時には、京の北山に別莊をつくりました。その家はこの世ながらの極樂の様に美しく立派であつたといひます。大方死んでいたうてい極樂へ行けさうにもありませんから、生きてゐる中に行つておかうと考へたのかも知れませう。家が立派であつたばかりでなく、その庭は日本中の大名にいひつけて、その國々の珍しい木や珍しい石を持ち集めさせて、お金や人足の入ることなどは少しもかまはず、出来るだけの美しいお庭をつくりました。そしてそのお庭の眞中に池に臨んで三層の建物をつくりました。その建物は壁にも窓にも天井にも、柱にも金を塗りました。それでその建物を金閣と名づけました。この金閣は今でも北山の金閣寺に残つてをります。義満はこの別莊が出来上りますと、室町の花の御所は將軍の義持に譲つて自分はこのに移りました。そして何もしないで、繪を見てよろこんだり、お茶を飲んだりしてそれを仕事にしてをりました。それから義満の事を『北山殿』

といひました。

これらはまだ日本國中の事で外國に對してどうといふ事でもありませんでしたが、ここに外國に對しても恥しい事をいたしました。

でそれは、この様に奢りをいたしましたので如何に將軍でもお金が足りなくなつたのであります。ところがその頃九州の者で明の國に渡つた者があります。この者が義満にすゝめて支那——すなはち明の國と貿易をすれば金が儲かると教へました。そこで義満は明と貿易をはじめようと、その九州の男に仲芳といふお坊さんをつけて手紙を持たして明の國へ送りました。それは應永八年でありましたが仲芳等はその翌年、支那の使と一緒に歸つてきました。義満はその使を北山の別荘へ迎へて明からの手紙を受取りました。

ところがその手紙には不都合なことが書いてありました。

『わざわざ使を送つて進物を献上したのは感心である、これから後も明に對して忠義をつくせ。』



金 園

と、書いてあるばかりでなく、義満の事をさして『日本國王源道義』とかいてあるのであります。義満はお坊さんになつてから『道義』といふ名になつてゐたのであります。すると義満はよろこんで『日本國王臣道義』とかいてその返事を出しました。これでは日本の國が支那の屬國になつたのと同じ事でありませぬ。しかも日本國王とかいてもらつて日本の王様になつたとよろこんでゐたのであります。日本には萬世一系の天皇様がおいでになります。ですから天皇様までをないがしろにしたわけでありませぬ。日本の國は昔から外國に對して恥をかいた事は一度もありませんでした。それに義満は明から屬國あつかひされて平氣でをり、天皇をないがしろにしてよろこんでゐたのであります。かうなつては、たとへ南北朝を合一した手柄がありませうとも、實に不都合極る者といはなくてはなりません。

義満はこんな國を恥しめ、天皇をないがしろにしなながらも、品物を明に送つてお金をもらつて奢つてゐたのであります。今でも日本に残つてをりまする『永樂通寶』といふ孔のあいたお金は義満が支那からもらつたお金なのであります。

しかもこの不都合者、不忠義者は奢りに一生を送つて應永十五年に五十一歳でなくなりました。

- 一 尊氏の死んだ後は、義詮がそのあとをつぎ、義満がまたそのあとをついだ。
- 二 元中九年義満は南北朝の合一をおたのみした。
- 三 後龜川天皇はこれをお許しになつて、京都へおかへりになり、神器を後小松天皇におゆづりになつた。
- 四 義満は將軍の職をその子の義持に譲つて自分は大政大臣となつた。
- 五 義満は花の御所を作つたり、北山に金閣を作つたり政治に怠り、奢にふけつた。
- 六 義満は自分の行列を上皇の御幸の儀式に眞似するなど僭上の行があつた。
- 七 又明からお金をもらつたり、又明の天子から日本國王といはれたのをよい事として、自分も日本國王と書いた書を送つて我國體をけがした行をした。

第二十八 足利氏の衰微

一 勢力が得たさに

足利氏は尊氏を最初として、どうかして勢力が得たい、権力をとりたいたと考へてゐたので、その後になつても、將軍も、侍たちも互に勢力を得たい、権力が握りたいと、そればかりを考へてゐました。ですからいつもその事で、將軍の家にも喧嘩がつき、侍たちの仲間にも争があつて、安らかな日はなかつたのであります。

その上義満を初めとして奢りや、遊びがすきであつたため日本のためにも、人民の

ためにも少しもよい將軍ではありませんでした。その事だけでくらすべても北條氏の力がどれだけよい政治家であつたかわかりません。

義満の後、義持、義量、義教、義勝、義政とつゞいて、義政の代になりました。義政も小さい時から我儘者で、政治の事はすつかり管領にまかせて、自分は花や紅葉と浮れあるき、それにつれて美しい着物を著飾つたり、茶の湯の遊びをしたり、猿樂の遊びをしたり、全くあそんで暮してをりました。

この管領といふ役は丁度頼朝が將軍になつた時、北條氏を執権といふ役にした様に、足利將軍の管領はこの執権の役にあたるので一番上の役でありました。足利氏の執権になる家は細川氏、斯波氏、畠山氏の三氏がありまして、世の中ではこれを三管領といつてゐました。

尙足利氏は鎌倉にも關東地方を治めるために關東管領といふ役を置きました。この鎌倉は前にもいひました通り幕府をひらきたいとまで思つてゐた所でありましたから、この管領は義詮の弟基氏をその役にあて、その子孫が代々鎌倉管領となりま

した。

けれどももいくらくさんの役を置きましても、それらがお互に仲を悪くしたり、人民のために考へなかつたりしてゐては、やがて自分たちが滅びることとなるのであります。

二 應仁の亂

かくして義政は三十歳になりました。義政には子がありませんでした。そこで自分の弟でお坊さんになつてゐる義尋をよんで、

「お前はお坊さんを止して私の後繼になつてくれないか。」

と、たのみました。すると義尋は、

「兄上はまだお若いから、いまに御子様が生まれませうから。」

と、斷りましたが、義政は、

「さうかも知れない。けれども後繼のないといふことは何となく心細い、若し後にな

つて子供の生れる様な事があつたら、その子はお坊さんにするから是非後継になつてくれ。』

と、いひましたので、義尋もやつと承知をして、お坊さんを止めて、名を義視と改めました。そして義視の世話役には三管領の一人である細川勝元といふ人がなりました。勝元は前にも一度管領になつたことがあり中々勢力のある人でしたから、義視も安心をしてゐました。

ところがその翌年義政には義尙といふ子供が出来ました。すると義視との約束ですからお坊さんにしなければならぬのですが、義尙のお母さんの富子は、折角生れた男の子をお坊さんにしたくはありません。行末はどうかして將軍にさせたいと考へました。これがそもそも騒動の起りであります。

さて義尙を將軍にするには義視を何とかしなければなりません。けれども義視には勝元といふ勢力者がついてゐますから、うつかりと、
『やつぱり義尙を將軍にします。』

などと申されません。けれどもどうし將軍にしたいのですから、それには一つ勝元と肩をならべても勢のまけないといふ人を見つけ出して、その人に義尙の世話をさしたらよいと思ひました。そしていろいろとさがしました末に山名宗全といふ人を見つけ出しました。

この宗全といふ人の娘は勝元の妻になつてをりまして、細川とは深い親類柄ではあります。勝元の妻が強いものですから、ふだんから勝元を嫉んでゐましたので、宗全が富子からその相談をうけますと、

『これはよい事が出来た。うまく義尙を將軍にすれば、私の勢力はきつと勝元よりも強くなるにちがひない。』

はじめから勝元と競争するつもりで義尙の世話役になることを引受けました。

丁度この時畠山の家でも義政と義就と争ひをしまして、長政は勝元に助けをたのみますと、義就は宗全に助けをたのみました。そればかりでなく斯波の家でも内輪喧嘩がはじまり、他の有力な大名の家でも喧嘩がはじまり、片方が宗全につけば、

片方は勝元につくといふ有様で騒ぎはだん／＼と大きくなりました。いよ／＼勝元が兵をあつめました。宗全も兵を集めました。諸國の兵はつゞきつゞいて京都へはいつてきました。これが應仁元年でありました。この時勝元の兵は十六萬人、宗全の軍は十一萬、室町の幕府をまん中にして宗全はその西に陣し、勝元は東に陣して毎日戦をはじめました。ですから京都の町の人はあぶなくて町にゐることが出来ません、誰も彼も荷物を片づけ、妻子をつれて逃げ出してしまひました。お公卿さんたちもめい／＼自分の知つてゐる大名などをたよつて遠方へ行つてしまひました。

戦は毎日つゞきました。街も焼けますれば名高いお寺や、お宮も焼けました。そしてはじめ勝元は義視のため、宗全は義尙のために戦つたのでありましたが、いつのまにか義政、義尙は東軍の方にをり、義視はあべこべに西軍の方にをるといふ様な變なことになつてゐますが、やつぱり戦つてをります。その中に應仁二年もすぎ三年には文明と年號がかはりました。その年の正月に義政は義尙を將軍にしました。

その中に文明五年の三月には一方の大將宗全が死にました。これで戦争が終るか



都の盡荒

思つてをりましたが、やつぱり戦争がつゞきます、つゞいてその五月には藤元も死に
ました。けれどもやつぱり戦つてをります。やつと文明九年になりました、大名たち
はめいくの國に歸つてしまひまして、京都の戦争はなくなりました。この間應仁
元年から十一年、京都は一面の焼野となりまして、昔からの記録や寶物もすつかり焼
けてしまひました。これを應仁の亂といひます。

汝や知る都は野べの夕雲雀

あがるをみても落つる涙は。

ほんとに京都の人にとつてはかなしかつたにちがひありません。焼野原の様な京を
ながめましては。ほんとに一人のものが慾張りを起ししても、他の多くの人にまで
迷惑がかります。ましてその慾張りが人々の上に立つ人であればある程大勢がこまる
のであります。

さて義視はどうなつたか、戦争のすむ時分は美濃の國に行つて戦からのがれてゐました。

かうして戦は止まりましたが、義政はすこしも自分の行を直さうとはいたしませんでした。戦争中も相變らず茶の湯よ、舞よと日を暮してゐました。そして文明十四年には義満の企閣にまねて東山に別荘を作りまして、そのお庭に二階造りの建物を造つてそれには銀をすつかりぬるつもりでありましたが、銀を買ふお金がなくて、名ばかり銀閣とつけました。今でも残つてをりまする東山の銀閣寺がそれでありま

す。
將軍義尙は二十五歳でなくなりました。そのあとを義視の子の義植がつぎました。この時義視も義植と一緒に美濃から京都へかへりました。その翌年の延徳二年に義政は五十六歳でなくなりました。次の三年には義視も五十三歳でなくなりました。この應仁の亂から足利將軍の勢はすつかり衰へてしまひ、日本中の大名を抑へる力はなくなつてしまひました。

一 義政は香りをきほめ、人民から多くの税を取りたてて人民をくるしめた。

義政には子がなかつたためその弟の義視をあととりとしてその輔佐を細川勝元にした。その後義尙が生れたため、これを將軍にしたいとその輔佐を山名宗全にまかせた。この細川と山名とは仲がよくなかつたので足利氏の相續あらそひは細川山名の争となつた。

二 應仁の亂

應仁元年細川山名は大軍を京都に集めて幕府の西と東にわかれて十一年も戦つた。宗全も勝元も死んでも戦はなまらず、京都は燒野となり、神社やお寺は燒き拂はれ歴代の寶物はなくなり世の中は戦争ばかりの世となつた。

三 義政はこの戦の中にあつて、遊びにふけり、香をたてて東山に銀閣をたてたりして世の中を治めようとはしなかつた。

第二十九 北條氏康

一 戦国時代

應仁の亂は終りました。終りましたといつても、たゞ兵隊が京都から引き上げたといふだけでございませぬ。國々に歸つた武士たちはこんどはその國々で戦争をはじめました。勢力がほしさに戦つた應仁の亂は十一年も戦つて、誰もみんなが權利をなくしてしまつたのを見ながら、大名たちは又その國々で勢力を張らうと戦つてゐるのでございませぬ。そして應仁の亂でさへも抑へることの出来なかつた足利幕府は、地方で起

る戦争などは到底抑へることも鎮めることも出来ませんでした。世の中はまるで強い者勝ちの有様となりました。この間が後土御門天皇から正親町天皇の御代まで四代大方百年程の間もつゞきました。これを戦国時代といひます。

戦国時代には英雄が四方に起りました。關東の北條氏、中部の武田氏、上杉氏、東海道の今川氏、中國地方の毛利氏などがその主なる人々であります。

二 北條早雲

戦国時代に伊勢國に、伊勢新九郎、荒木兵庫、多目權平、山中才四郎、荒木又四郎、大導寺太郎、有竹兵衛といふ七人の元氣な侍がゐりました。或日この七人の者が集りまして、

「この様に世の中が亂れては、誰が頭ともわからない、男と生れたからには、一つ天下にその名を擧げようではないか。わけて關東は土地は廣く、昔から英雄の出場所となつてゐる。一つそこへ出かけて一つの城の主にならうぢやないか。」

と、相談いたしました。そこで

『それでは七人で行かう。七人の者はいつまでも仲よくして、誰でもよいこの中の一人が城の主となれば、六人の者はその家来にならう。』

と、約束しました。そこでこの七人は伊勢から東の方へ下りました。それは文明八年の事でありました。その時分駿河の國には今川義忠といふ武士がをりました。この義忠と新九郎とは親類でありましたので、まづ七人は今川氏の所にしばらく足を止めておきました。

ところがまもなく義忠は死にました。ところがその子の氏親がまだ幼いので臣來の中で勢力争ひの喧嘩がはじまりました。それがために、氏親の母は氏親を抱いて、山の中へ逃げてしまひました。

この時關東管領は義政の弟の政知がなつておりましたが、駿河國が亂れたとききますと、家來の上杉政憲、上杉朝定の二人を送つて、その騒動を鎮めさせました。この時新九郎は、この二人に逢つて、

『家來たちは謀叛を企らんで喧嘩をいたしてをるのではありません、どうかしばらく私にお任せ下さい、きつと争を鎮めます。もし鎮まりませんでしたら、その時になつてご征伐をして下さい。』

と、たのみました。二人の者もそれを許しますと、新九郎は早速喧嘩してゐる者たちを集め、

『お互に喧嘩してをる時ではありません。いつまでも争つてゐては、今川の家は亡んでしまひます、一つ心を合せて今川のために盡さうではありませんか。』

なるほど、自分が偉くならう、少しでも得をしよう、と争つてゐては、第一今川の家がつぶれさうですから、家來たちもやつと新九郎のいふ事をきいて、喧嘩を止めました。そこで新九郎は、いそいで氏親母子を山から迎へて來ました。これで騒動がやみました。騒動がやみますと、鎌倉からきた二人の上杉も兵をつれて、歸つてしまひました。この時のてがらで新九郎は八幡山城主となりました。

たうとう、新九郎は一つの城の主となりましたので、他の六人の者はよろこんでそ

の家來になりました。

けれども新九郎の望みは今川から小さい城を一つもらつて、それで満足してゐる様なものではありません。その城を足臺にして、廣い關東へ躍り出さうとしてゐるのであります。

間もなく新九郎は、八幡山城から興國寺城に移りました。この城は伊豆の境に近い所にありますので、新九郎はそこから伊豆の様子をうかがひはじめました。

伊豆の堀越といふ所には、關東管領の役所のある所でありまして、新九郎は今、その管領の役所をめぐらしてゐるのであります。その時分、堀越の管領は、將軍義政の弟の政知がしてゐたのでありますが、政知の子の茶々丸は繼母の悪告げに逢つて長い間一つの部屋の中へ押し込められてゐたのであります。或晩、茶々丸はみはりの人の隙をみて、部屋をぬけ出し、その繼母さんを殺してその上に父の政知までを殺して、獨立をいたしました。それを知りました新九郎は『それ時がきた。』とそろゝ活動にかゝりました。先づ、伊豆の修善寺の温泉へ行きまして、そつとその様子

を窺ひました。この關東管領には上杉氏といふ執事があるのでありますが、その上杉家が二軒ありましてこれも亦、權力の取り合ひから、喧嘩をいたしてをりますので、茶々丸がこんな騒動を起したにもかゝはらず、誰一人それを取り鎮めるために歸つてくる者もありませんでした。ですから伊豆にゐる兵隊はまことに少ししかをりません。それを知つた新九郎は、

『伊豆をとるのは今だ。』

と、急いで興國寺城に歸つて、六人の者とも相談して、五百人ほどの兵をつれて、堀越をさして進んで行きました。茶々丸は何の用意もしてをりません。たちまち城はとられてしまひ、茶々丸は自殺をしてしまひました。これで新九郎はすつかり伊豆をとつてしまつたのであります。伊豆をとつた新九郎は自分の城を葦山といふ所につくりまして、そこに移りました。そこで北條といふ氏に改めました。間もなく、頭をそつて早雲と名を變へました。

早雲は一國の領主となりましたが、まだそれに満足してゐるではありません、關

東を領してゐる兩上杉を亡ぼして關東を自分の物にしたいのであります。所がこの上杉氏の勢力はなかく強くて、早速に亡ぼされさうにもなく、その上相模の小田原城には大森實頼といふ者がをりますので、關東へは、一足も足をふみ込む事が出来ません。それで、早雲はどうかして、この小田原の城をとりたいたいと、考へました。そこで第一に實頼に油斷をさせよう、と珍らしいものや、おいしいものを送つて、仲よしになりたいたいと、頼みました。この實頼といふ人はなかくしつかりとした智恵のある人でありましたから、

『理由もなく、人に物を送つたりするやうな者は油斷が出来ない。』

と、程よく挨拶をして、決してうつかりと、しませんでしたから、早雲も手の出しやうがありません。所が間もなく實頼は死んで、その子の藤頼がその後をつぎました。藤頼はまだ小さいのですから、早雲に深い謀のある事などは少しも解りません。早雲の方から、いゝものを持つてきたり、仲よしになりたいと云つて來ると、すつかり信用してしまひました。それを知つた早雲は、

『いよく時機がきた。』

と、よろこびました。

明應四年九月、早雲は使を小田原に出して、

『この間から私の方の山で、狩をいたしました。たくさんの鹿や猪が箱根の山の中へ逃げましたので、それをとりたいと思ひますが、少しばかりの勢子の者を、箱根山へ入れてもよろしうございませうか。』

と、頼みました。ふだんから親切にしてくれる早雲の事でありますから、藤頼は少しも疑ふことなく、

『ご遠慮なく、ご自由になさつて下さいませ。』

と、返事をしました。そこで早雲は早速勇敢な武士五六百人を勢子の様子に仕立て、一隊は熱海の方から、一隊は湯本の方から、小田原を指して進んで行きました。日の暮れるのを待つて、この二隊が一度に、小田原の城に攻めかかりました。小田原にはふだんならば、たくさんの兵士が居るのでありますが、この頃上杉の戦争に出てゐる

すので、城にゐる兵隊は僅かでありました。その上、不意を襲はれたのでありますから藤頼は、たちまち城を開けはなつて、三浦の方へ逃げてしまひました。早雲はかうして一度に小田原の城をとつてしまひました。それから相模の城々を陥して、永正十五年には相模の國がみんな早雲の物になつてしまひました。そこで、その子の氏綱を小田原の城に置き自分は韭山の城にをりました。その翌年、早雲は八十八で亡くなりました。その死ぬ時に、氏綱等を、枕元によびまして、

「上杉の兩家を亡ぼして、關東八州をとりたいと望んでゐたが、まだその目的をすつかりとげない中に死んでしまふのは如何にも残念である。お前たち子孫の者はしつかりして、きつとこの目的をとげて呉れ。」

と、いひ置きました。

氏綱も父にまけない武勇にすぐれた人でありましたのでお父さんの志をついで、しきりに兵をすゝめて相模の國を定め、進んで上杉朝興と武藏國を争ひました。大永四年に氏綱は武藏の江戸城を取つてしまひましたので、朝興は河越の城へ逃げてしま

ひました。天文六年四月に朝興が死にました。朝興がそのあとをつぎましたが、その七月に氏綱は河越城を攻めて朝定を追ひ出してしまひました。

これから氏綱の勢はますますよくなりましたして、武藏、下總の城々はみんな氏綱に降参してしまひました。たゞ一人足利義明といふものが下總の御弓といふ所にゐまして、氏綱に降りません。そこで氏綱は天文七年に御弓御所を攻めにかかりました。すると安房の里見義弘といふ者が安房、上總の兵をつれて、義明を救ひにきました。氏綱は義弘等と鴻の臺に戦つて大いにこれを破りました。その十年に氏綱は五十五歳でなくなりました。

氏綱のあとをついで子の氏康が立ちました。この時分は上杉朝定の勢は弱つてをりましたが、上杉憲政の勢はまことによく、甲斐の武田信虎（信玄の父）も駿河の今川義元（氏親の子）もみんな憲政に味方してをりました。けれども憲政はなまけ者の上に奢りのすきな人でありまして、戦の事などには一向氣をつけません。北條氏の事などにつきましても、

「あんな奴が何をやるものか、こはがらなくともよい。」
 と、威張つてゐました。けれども長尾意玄といふ家來一人は油断のならないのは北條だといつても心配をしてゐました。そこで二人の侍を軍事探偵として小田原にやつて北條氏の様子を伺はせました。二年程の後二人の者は歸つてきまして、意玄にいひますには、

「氏康といふ人はなみく／＼の人ではありません。よく沈着てをります。その上學問もしてをります、軍の事にも精を出してをります。その上禮儀正しく、家來を大切にし人民を愛し、多くの家來も、たくさんの人民もみんな氏康のためには命を的にして働かうと覺悟してをります。そして早雲の死ぬ時に上杉を亡ぼすのは三代のあとだといつたさうであります。その三代目といひますが、あの氏康でございます。決して油断はなりません。」

と、くはしくその様子を話しました。意玄もこの報告を成程だと思ひました。そこで意玄はその事を憲政にいつて、

「今兩上杉が親類でありながら争つてゐる時ではありません。力をあはせて北條氏にあたらねばなりません。」

と、話しました。そこで憲政はまづ朝定と和睦をしました。奢りも禁じました。それから軍の準備もいたしました。ところが意玄と仲のわるい家來たちがゐまして、

「何だ、早雲は伊勢の乞食ぢやないか。それが今川氏のおかげで一つの城をいたゞいたのをよい事にして、伊豆をぬすみ、小田原を取つた泥棒みた様な奴だ。氏康はその孫だ、乞食の孫に何がおそろしいのか。意玄などがびくついてゐるわけがすこしもわからない。天下の豪傑といへば、西では大内、東では、この上杉だ。何がおそろしい。」

と、いひだしました。これをききました憲政は成程、その通りだと折角戦の準備をしかけたのも止して、相かはらず奢りをはじめました。

天文十四年に兩上杉が大兵を率ゐて河越の城を圍みました。河越の城は氏康の家來の北條綱茂といふ者がまもつてゐました。敵が河越城を圍んだとききますと氏康は、

早速援けに出かけましたが、その行くまでに城が陥つてはなりませんから、網茂の弟の辨千代といふ者を使として、まづ城に入らして、

『どんなに苦しくても私の行くまでは降参してはならない。』

と、いつてやりました。けれどもこの時氏康は方々へ兵を出してゐた時でありましたので、手許にはたつた八千人程の兵しかをりません。それに河越城を圍んでゐる上杉の兵は八萬人もゐたのでありますから、あたりまへの戦争をしては、到底勝つ見込みがありません。そこで氏康はわざと仲直りを申込みました。けれども憲政は承知しませんでした。そこで氏康は入間川の南の方まで進んで行ききました。すると上杉の兵が攻めかかつてきました。氏康は矢一本もはなたずに逃げてしまひました。そして間者を上杉の方へまはして、上杉がどんな事をいつてゐるかをきかせました。

間者が歸つてきていひますには、

『上杉の方では「北條の腰ぬけ共は逃げてしまつた」といつてをります。』

と。それからまた五六日たつて氏康は川の南まで進んで行ききました。すると上杉の兵

が攻めてきます。氏康はまた戦はないで逃げてしまひました。氏康はまた間者を呼んで、

『敵は何といつてゐた。』

と、ききますと、間者は、

『あの弱虫共はもう來ないにちがひない、來ても「叱ッ」といへば逃げてしまふにちがひない。といつてをります。』

と、つげました。そこで氏康は兵士たちに、

『戦は兵が多いからといつて勝つにきまつてはゐない、兵が少なくて勝つた例はいくらもある。今日の様子では、こちらの一人で敵の十人にあたらねばならない、その覺悟で進まねばならない。今晚は私が先登に立つて進むから、皆はそれにならつてついて來い。』

と、それから白い布をめいゝの鎧の上につけて目じるしとしました。そして又いひました。

『白い布のついてゐない者に遇つたらば誰でもかまはず斬つてしまへ。その首なんかは取らなくともよい。』

と、命令しました。そこで夜半頃入間川を渡つて、まつ直に上杉の陣に攻め入りました。上杉の方では北條の方は弱い者と油断をしてをりましたので、この襲撃に出逢ひますと、たちまち陣がみだれてしまひました。そこへつけこんで氏康の兵は縦横無盡に斬りまはりました。この時上杉方の死んだり傷いたりした者が二萬人、大將の一人の朝定は捕虜になつてしまひ憲政は命からく逃げてしまひました。この戦で、關東八ヶ國の武士たちがまた北條氏についてきました。この時は天文十五年四月二十日の事でありました。

河越から逃げた憲政は上野國に歸つてをりました。氏康は二十年にこれを攻めてその城を陥れましたので、憲政は越後に逃げて長尾輝虎をたよつて行きました。

これで兩上杉は滅亡んでしまひました。まもなく足利晴氏も亡ぼされてしまひました。そこで關東八ヶ國はたうとう北條の者となつてしまひました。その後北條氏は氏

政、氏直とつゞいて關東に勢をはつてゐました。

一 應仁の亂の後大名たちはめい／＼その國にかへつて互に戦つた。これを戰國時代といふ。

二 北條早雲は伊勢の人で、はしめ今川氏により、後伊豆なとり、更に小田原城をとつてその勢を東國に振つた。

三 早雲の子の氏綱は兵を武藏に進めて、上杉氏を破つて江戸、河越の城を自分のものにした。

四 孫の氏康は上杉氏を亡ぼして伊豆、相模、武藏、上野等の諸國を自分のものとし、よく人民を治めたので北條氏は長く榮えた。

第三十 上杉謙信と武田信玄

一 上杉謙信

憲政のたよつて行きましました越後の長尾氏は、上杉家の家老でありまして代々越後に
 ゐたのでありますが、輝虎の父の爲景の時から獨立してこの領主となつたのであり
 ます。輝虎は爲景の次男でありまして、七歳の時にお寺へやられて坊さんにされ様と
 したのでありますが、お經よりは戦の方が好きで、師匠のいふ事もあまりききませ
 ん、しかたなく九歳の時に家へもどされてしまひました。お父さんの爲景はこまつた

小僧だと心配してゐましたが、そのお父さんは天文十一年に越中で戦死しましたので
 そのあとを兄さんの晴景がつぎました。ところがこの兄さんは別段すぐれた人でなか
 つたので、越後の武士たちの中には、その命令をきかない者がだん／＼と出来てしま
 した。しかし晴景はこれを鎮めることが出来ません。戦の事にかけては、どうも、
 弟の方が上手なのでございます。そこで晴景は家を輝虎につがせることにいたしま
 した。お坊さんになりそこねた輝虎はここにお父様や兄様について春日山城の主とな
 りました。この春日山城は今の高田市の近所にあつたのであります。

輝虎の従兄に長尾政景といふ勇士がありました。この政景は戦も上手、それにつ
 れて勢も強かつたものですから、年若い輝虎を輕蔑してその命令に従ひません。あ
 べこべに春日山城を攻めて自分が越後の領主になりたいと、輝虎を攻めてきました。
 この時輝虎の側には戦の上手な宇佐美定行といふ年取つた家來がをりました。定行
 は政景の攻めてきたのを知りますと、

『城を出て戦をしませう。それでなくば勝つことが出来ません。』

と、いひましたが、輝虎は敵の様子を眺めて、
 『いや／＼出て戦ふ時ではない。敵の後に兵糧車のついてゐないのを見ると、城をい
 つまでも圍んでゐる考はないらしい。敵が圍をといて歸りかけた所を攻めて行けば
 きつと勝つにちがひない。』

と、城門をしめて戦はうとはしませんでした。定行は心の中で『まだ若いから軍の事
 は知らない、自分のいふ様にすればいい。』と考へてゐましたが、主人の命令ですか
 ら仕方なく城の中ををりました。するとその晩になつて、敵は果して退却をはじめま
 した。それを知つた輝虎は、

『それ、攻めて行くのは今だ。』

と、サツト城門を開いて追撃いたしました。政景は、輝虎が自分におそれて城の中か
 ら出ないのちがひない。』と思つてゐたのでありますから、それだけ油断もしてゐま
 した。そこを攻めて來られたのでありますから、支へることも出來ず、今度はほんと
 に逃げ出しました。逃げ出せば逃げ出す程輝虎の追撃は激しくなつて行きます。政景

はやがて山路にさしかゝりました。その坂の下まで攻めて來た輝虎は、

『やあ、眠くなつてしまつた。ここらで一寢入りして行かうか。』

と、道傍の百姓家へはいつてごろりとねてしまひました。字佐美定行がまた驚きまし
 た。

『折角ここまで追つてきて、敵が坂路にこまつてゐる所を討ちかゝれば勝つことはき
 まつてゐるぢやないか。その大切な時になつて一寢りとはやつはり戦の法を知らな
 いのだ。』

と、腹が立つ程氣を揉んでゐますが、大將の輝虎は大將でねてをります。しばらくた
 ちますとガバとはね起きて、

『敵はもう峠を越えた時分だらう、それ進め。』

と、兵を進めて、今峠のあちらへ下りようとする政景の軍をめぐけてなだれ落らる様
 な勢で攻めかゝりました。戦上手の自慢の政景も、その勢には敵しかねて、たう
 とう兜をぬいで降参してしまひました。その時輝虎はたつた十八歳の大將であつたの

であります。宇佐美定行はこの時五十九歳、立派な軍師であつたのでありますが、その軍略も輝虎には及びませんでした。この様な輝虎でありましたから、お父さんのなくなつた後亂れはじめた越後の者も、輝虎を恐れてみんな従ひました。

上杉憲政がこの輝虎をたよつて逃て行つたのは、輝虎の二十二歳の時でありました。元から元氣であり、俠氣のある輝虎でありますから、よろこんで憲政を迎へました。『及ばすながらお力になりませう。』

と、キツパリと請合つた様子は若いながらもたのもしく見えませんでした。そこで憲政は輝虎と親子の約束をいたしまして、上杉といふ氏を名乗らせました。それから上杉輝虎といふ名になりましたが、その翌年輝虎は髪を剃つて名を謙信とかへました。

謙信は憲政のたのみによつて幾度も兵を關東に出して北條氏と戦ひました。謙信と氏康、それはどちらも強い大將でございます。それだけ戦の仕方にも烈しかつたにちがひありません。一度謙信が大兵を率ゐて小田原城を攻めたてた時などは、氏康は謙信の様子を見て、

『あの勢にあたつてはどれだけ兵士を殺されるか知れない。戦をしないで城にはいつてゐよう。』

と、關東の武士たちをすつかり城の中に入れて少しも戦はうとはしません、謙信は關東の平野を大風の吹く様に小田原にまで攻めてきましたが、城の中からは誰一人出てきません。けれども堅固な小田原の城を攻め落すには長い年月と、その準備をしなくてはなりません。仕方なく、そのまゝ越後に歸つてしまひました。氏康はホツと息をついで、

『やれ〜歸つてくれた。全く激しい勢だつた。』
と、舌をまいて驚いたといふ事でありませう。

二 武田信玄

戦國時代に、謙信とならんで戦上手といはれて勢の強かつたのは、甲斐の武田信玄であります。

武田氏は源義家の弟新羅三郎義光の子孫でありまして代々甲斐國にをりました。その長い間武田氏は別段強い武士といはれる程の人もありませんでしたが、信玄になつてその名が一時に著れました。

信玄のお父さんは信虎といふ人で信玄はその長男でありました、はじめ晴信といふ名でありましたが、三十一歳の時に髪を剃つて、信玄といふ名にかへたのであります。或時信濃へ攻め入らうとして、家來たちと相談をしてゐた事がありました。丁度その時一羽の鳩が飛んできて庭の樹の上にとまりました。これを見ました家來たちは、『珍しい鳩がこんな所へ來た。これはきつと八幡様のお使しめにちがひない。今度の戦は大勝利だ。』

と、喜びました。これをききました信玄は、

『くだらない事をいふものではない。今鳩が來たからよいが、もしもここへ蝶がとんで來たとすればどうする。その時にはお前たちは蝶は平家の紋だ、それがこんな所まで舞つて來る様ではこんどの戦は負けるにちがひないと、臆病風に吹かれるにちがひ

ない。そんな心で戦争は出來ないぞ。』

と、早速鐵砲でその鳩を打ちとつてしまひました。

こんな性質の人でありましたから、一生の間城を築きませんでした。今甲府の北方の山の麓に信玄の城址といふものがのこつてゐますが、それは城ではなく、たゞ屋敷の址でありまして、城のあとではありません。

人は城、人は石垣、人は濠

情は味方、仇は敵なり。

と、いつて、『いくら石垣が高かくとも、いくら濠が深くとも、大將と家來との心はなれなくになつてゐては何の役にも立たない。』

『俺の城は兵隊だ、俺の濠も兵隊だ。』と、城の事などは一向氣にかけませんでした。

三 川 中 島 の 戦

この戦は有名な勇ましい、しかも面白い戦であります。まづどうして武田信玄と上杉謙信とがここで戦をしたのかといふわけをいはねばなりません。

この時分美濃國の葛尾といふ城に村上義清といふ武士がをりました。長く武田信玄と戦つてをりしたが、上田の邊で戦つたのを最後として、義清はたうとう越後に逃げて上杉謙信にたよつてその助けをたのみました。この時、謙信がまだ十八歳の時でありました。

(謙信ははじめ景虎といつてゐましたが、永祿四年五月に京都に上つて將軍義輝に逢つてその名を二字をもらつて輝虎といつたのであります。)

義清が、

『城はとられ、國を追はれて恥しくもお助けをたのみにまゐりました。どうぞ今一度葛尾の城へ歸らして下さい。一生の願ひでございます。』

と、涙を流してたのみましたので、俠氣な謙信は、

『年の若い私を見かけてお願ひになるのをいやとはいはれません。私はまだ父の仇も討たず、前から望んでゐた京都へも上つてをりませんが、一つお盡しいたませう。』

と、快よく引き受けました。そして、

『しかし晴信といふ男はどんな戦の仕方をいたしますか。』

と、問ひました。義清は、

『なか／＼智恵計略のある男でございます。小敵を侮らず、大敵を恐れず、勝つても傲らず、負けても氣を挫く様なものではございません。』

と、いひますと、謙信は、

『さては軍略で戦ふ男であるな。よし／＼それではこちらにも用意があるぞ。』

と、戦の方法を考へました。

天文六年十月謙信は兵八千人をつれて信濃へ來ました。信玄はこの事をききます

と、兵を率ゐて上田の邊にまできました。この時謙信は使を信玄の所へ送つて、
 『私わたくしはあなたと何の恨うらみももつてゐません。たゞ義清よしきよにたのまれてここまで兵を出し
 てきました。しかし戦たたかつて兵を殺ころしたくもありません。もし葛尾かつらぎの城を義清にお返し
 になればこのまゝ兵を引き上げませう。』
 と、いつてやりました。すると信玄は、

『お心の程は承知しやうちしましたが、戦たたかつて取つた城をそのまゝ返すことも出来ません。戦
 はうとお思おもひになつたら戦たたかつて下さい。こちらからは手出しをいたしません。』
 と、返事へんじしました。そこで戦たたかいはじまりました。兩軍りやうぐんははげしく戦たたかひました。しか
 し、勝負しょうぶはつきません。やがて謙信は兵をまとめて、國に歸りかけました。甲斐の兵
 が、

『それ敵てきが逃にげるぞ、追おひかけろ。』
 と、いひますと信玄は、

『いや／＼逃にげるのではない、追おひかけてはこちらがあぶない。』

と、これも兵をまとめて國へかへりました。

あとで信玄は、

『景虎かげとらは年は若いわかいが、油断ゆだんの出来ない大將たいしやうだ。勝つ見込みがないと思へば、早速兵を
 まとめて歸つてしまつた。いや私わたくしにとつてはよい相手だ。』

と、感心かんしんしてをりました。これが、武田たけだ、上杉うさぎ第一回の戦たたかひでありました。

天文十七年、謙信はまた兵を率ゐて信濃へ來ました。信玄も又出て來ました。こん
 ども上田の邊で對陣たいじんしました。謙信が戦たたかはうとすると信玄が戦たたかはうとしません、信玄
 が謙信に油断ゆだんないかと伺うかがひますと、謙信に少しの油断ゆだんもありません。かうして十日程
 も睨にらみあつてゐましたが、謙信は急にだらしない列をつくつて國へ歸りかけました。
 甲斐の兵たちは、

『それ討ちかゝるのは今だ、兵士に少しの規律きりりもない。』

と、追ひかけようとし、信玄は、

『これ／＼。あれが敵の策略だ、うつかり近よつたらとんでもない目にあはされる

ぞ。』

と、追ひかけさせません。謙信は歸りみち／＼考へました。

『怜悯な信玄だ、引っぱり出してやらうとしたがやつぱりかゝらない。』

と、そのまゝ國にかへつてしまひました。これが第二回の戦でありす。

その翌年の十八年四月に謙信は八千人の大兵をつれて信濃へきて、甲斐方の城を攻めました。すると信玄は一萬人の兵をつれてこんども上田の邊に出てきました。信玄が謙信の陣の様子は、と偵ひますと『いつでもござれ。』といった調子で待つてをります。謙信が信玄の陣は、と探つてみますと『それ今攻めて行くぞ。』といふ構をしてをります。これではどちらも手出しが出来ません。又十日あまりも向ひあつてをりましたが、謙信は使を信玄の所へ送つて、

『こんなな戦もしないでゐては退窟でたまりません。私はこれから能登、越中の方へ一戦しに行つてきます。』

と、いつたまゝ、落ちつき拂つて歸つてしまひました。信玄も又國へかへつてしまひ

ました。これが第三回の戦であります。

十九年の四月、謙信はまた佐久平といふ邊へ出てきました。信玄は一萬人の兵を率ゐて來ました。信玄には山本勘助といふ軍上手の家來があります。勘助は『こんどこそ謙信を打ち取つてやるぞ。』と八陣といふ戦の陣立をして謙信に向ひました。すると謙信は、

『はゝあ、跋の勘助めが考へ出した事だな。俺をまん中に取り圍んで負かしてやらうといふ考だな。よし／＼それなればこちらからその真中へをどりこんでやるぞ。』

と、鐵砲をつゞけざまに打ち放ちながら、関の聲をあげて進んで行きました。信玄の方ではいちばんおしまひにまん中へとりかこむ策略が、いちばん先に真中へ飛びこまれたので大騒ぎでございます。そして、どちらも負けず、劣らず戦ひました。ところが戦最中に大風が吹いてきて、石を飛ばし立樹を吹き倒す程の大暴となりました。謙信は『これでは勝つことは出来ない。』と又國にかへつてしまひました。信玄も亦國へ歸つてしまひました。これが第四回目の戦であります。

その年の九月に謙信がまた上田の邊に出てきました。信玄も亦出てきました。その時もやつぱり勝負がつきませんでした。

二十一年の三月に謙信はこつそりと信濃へ出てきましたが、信玄はそれをちやんと知りまして早速出てきました。この時の戦はずるぶんと激しく兩方とも大部死んだり、傷ついたりしましたが、勝負はやつぱりきまらず、兩方とも引き上げてしまひました。これで上田の邊で戦つたことが六度でありました。

二十三年の六月に謙信は信濃へ出てきましたが、こんどは上田の方でなく、長野の方へきました。これが川中島の第一回の戦であります。しかしその時も勝負なしの別れでした。

弘治二年に川中島で第二回の戦をはじめました。その時は一度は信玄が勝ち、一度は謙信が勝つて、おアイコで別れました。

弘治三年に第三回の川中島の戦がはじまりましたが、或日信玄の間諜が歸つて信玄にいひますには、

『謙信の兵は毎日薪芻をしてをります。あの様子では長くここにをる考の様でございませう。』

と、いひますと、信玄は首をふつて、

『イヤ、さうではない。今にきつと謙信の陣中から火がもえ出すにちがひない。近よらない様にせよ。』

と、やがてその事を味方の兵にしらしめました。その日暮頃になりますと、間諜がまた歸つてきまして、

『敵は荷物を國の方へ送つてをります、大方國へかへるつもりでございませう。』

と、いひました。みんなは『それでは追ひかけてやらう。』といひますと、信玄はまた首をふつて、

『謙信がどうして夜夜中國に歸るものか。追つかけたらひどいめにあふぞ。』

と、追つかげさせません。その晩の夜明け頃謙信の陣から火がどうくんと燃え上りました。甲斐の方は信玄の命令通り少しも出て行かうとしません。夜があけてみますと

陣を焼いて歸らうとする様子を見せた謙信は、立派な陣を構えて、甲斐の兵の來るを待つてをりました。それを見た甲斐の兵は、

「おそろしい奴だ、昨夜うっかり追つかけたらみんな殺される所だつた。それにしてもうちの大将は何でもよく知つてゐるのだねえ。」

と、舌をまいて感心してをりました。これではやつぱり戦争になりません。こんどは信玄の方から先に國へかへりました。謙信も亦國へかへつてしまひました。

これまで武田と上杉とが信州で戦をすることが十何年の間でございます。そして勝負がつかないのでございますから、どちらもちれつたくてたまりません。謙信は早くこの戦を片づけて京都へ上つて、大いに日本中に自分の勢をはりたくてたまりません。そこで謙信は永祿二年の二月に信玄の所へ使を出して、

「あなたと戦をしてをりますが、私はたゞ村上義清にたのまれてしてをりますのであなたに何の恨もありません。どうでせう、いい加減に和睦しようぢやありませんか。そして私は越中、能登、加賀を討つて死んだ父の靈をなぐさめたいと思ひます。あ

なたも亦あなたをしたい仕事がありませうから、それをなされてはいかゞです。」と、いつてやりました。

やがてその談判が千曲川の岸で開かれました。ところがその時信玄はわざと謙信を怒らして仲直りがめちや／＼になりました。信玄がなせそんな事をしたかといひますと、信玄は前から上野國が欲しかつたのと、早く京へ上つて天下に號令をしたいといふ大望を持つてゐましたので、上杉と和睦しますと、それが二つともうまく行かないわけがあつたのであります。

やがて第四回の川中島の戦がはじまりましたが、その時もやつぱり勝負がつかないで二人はめい／＼その國に引き上げました。

謙信が京都へ上つて將軍義輝にあつたのはこの戦の後の事でありました。

永祿四年の八月謙信は京都から歸つていよ／＼信玄と最後の勝負をきめたいと、一萬三千人の兵を率ゐて春日山の城を出ました。信玄はその事をききますと、これも二萬の大兵を率ゐて甲府を出ました。その時謙信は妻女山といふ所に陣を構えました。

信玄は茶臼山といふ所に陣を構えました。謙信は信玄に茶臼山に陣されますと、歸る道をふさがれてしまひますので、越後の兵士たちは『さてはこまつた事になつた。』と心配をはじめましたが、大將の謙信は一向平氣でお側の者と一藉に話をうたつたり、鼓をうたつたりして嬉しさうにしてをります。信玄はまた、

『謙信奴きつとこまつてゐるにちかひない。』

と、思つてゐますと、間諜の者か『謙信はうれしさうにしてゐます。』といひますので『さては』と小首をかたむけてしばらく考へてゐましたが、ボンと膝をたゝいて、

『これはうつつかりしてゐられない。』

と、急に茶臼山から下りて、海津城（松代の城）にはいりました。越後の兵はそれを見て、

『やれ〜信玄はどいてくれた。』

と、よろこびましたが謙信は、

『これはしまつた。』

と、こまりました。それは謙信は朝日山といふ所の城主を自分の味方に入れて、それに茶臼山の後から攻めさし、自分は前から行つて、信玄をはさみ撃にしようと思つてゐたのが出来なかつたからであります。その事は越後の兵も知らなかつたので大將とは別な心配をしてゐたのであります。

信玄の方では海津の城に入つて、どうして謙信を攻めようかと相談をいたしました。そして兵を二つにわけて、一軍は謙信の陣をせめて謙信を川中島に追ひ出し、その追ひ出た來た所を、信玄がそこにまつてゐて、討取つてしまはうと思つて考へました。

そこで九月の九日の晩の十二時頃一萬二千の武田勢は妻女山をさして進みました。そして信玄は八千の兵をつれて、その晩の二時頃川中島に向つて進みました。甲斐の兵はみんな勇み立つて、

『今晚こそ謙信の首を取つてやる。』

と、喜んでをりました。

ところがその九日の夕方謙信は山の上から海津城を眺めてゐますと、盛にご飯を炊

く煙が上つてをります。

『何だ、兵糧の用意をしてゐるな。』

と、思つてをりますと、やがてその煙は止まりました。しばらくしますと、又飯を炊く煙が盛に上ります。それを見ました謙信は、急にみんなの大將をあつめて、

『十五年の間も戦つて来たのにまだ信玄の首をとることは出来なかつた。今度こそあの坊主頭をとることか出来るぞ。明日はいよいよ武田の方から戦をしかけて来るにちがひない。俺が考へるに、信玄はきつと兵を二つにわけて、一手は今晚の中にこちらへ攻めて来る。一手は川中島に出て俺のそこへ出て行くのを待つてゐるにちがひない。しかも信玄は川中島に向ふのであらう。それは海津の城から二度に煙の上がつたのを見て兵が二つにわかれるといふ事を知つたからだ。そこでこちらの方だが、敵の計略の裏をかいて、まづ信玄が川中島に來ない先に、こちらから川中島へ出て、あれの來るのを待つてゐよう。そしてまだ早いと、信玄がうつつかり來た所を急に攻めこんで勝負を一度にきめてしまひたいと思ふが、どうだ。』

と、いひますと、みんなそれに賛成しました。それから自分の陣の方々に大箒を焚いて如何にも敵を待つてゐる様にみせかけ、その晩の十時頃に山を下りて、こつそりと川中島へ出ました。幸にも雨が降り出してあたりはまつ暗でございます。人も馬も聲を忍ばせて千曲川を渡りました。昔の人はこの時の様子を『鞭聲肅々夜河を渡る。』と詩につくりました。首尾よく川中島に出た謙信はそこに陣を整へて信玄の來るのをまつてゐました。

ところがこの大事を信玄は知りませんでした。信玄もやはり川中島まできました。その朝方は霧が深く、どこが山とも、河とも分かりません。しばらくしますと、夜のあけるのと一緒に霧がはれました。信玄はふと前の方を見ますと、二三丁の所に、謙信の大軍が堂々と構えてをります。さすがの信玄もアツと驚きました。けれどもさすがに信玄だけあつて、早速兵を十二隊にわけて戦の用意にかゝりました。けれども早く戦つては信玄の損です、どうかして妻女山へ行つた味方のここに來るまで待つてゐたいと思ひますが、謙信の方では妻女山の方から信玄の兵のこない中に信玄を撃

つてしまひたいと思ひます。そこで謙信の方からはげしく撃ちかかりました。甲斐の兵は必死になつて戦ひましたが、十二隊の中、その九隊までみんな謙信の方に破られてしまつて、たつた三隊だけが、必死になつてもちこたへてをります。山本勘助もたうとうこの時死んでしまひました。

謙信はここぞと、三尺ばかりの竹の棒を持つて、

『それ掛かれノ。』

と、號令を下しますと、越後の兵は一齊に鐵砲を放ちながら進みます。

この時信玄は霰の様に飛んで來る丸の中にあつて、ちつとも動かうともしません、

『ソレ打てつ。』

と、號令をかけますと、甲斐の兵も越後の兵に敗けない様鐵砲を打ちます。

『ソレ進めツ。』

と、號びますと、槍を振つて風の様に進んで行きます。

この時謙信は『よし、信玄を探し出して一騎打の勝負をしてやらう。』と信玄を

さがしてゐました。すると八幡原といふ所に信玄があるといふ事がわかりましたので、謙信は唯一人そこをさして進んで行きました。

行つてみますと、信玄と同じ鎧兜を着てゐるものが七八人もゐまして、どれが信玄なのかわかりません。氣の早い謙信は、

『どれが信玄なのか、早く出て勝負をしろ。』

と、怒鳴りました。すると原虎昌といふ信玄の家來が、

『信玄公はこんな所にいらつしやるものか、狼狽るな。』

と、いひながら槍を振つて謙信を突きました。そこへ謙信の家來がきて原虎昌に相手になつて行きました。虎昌は、そこにゐるのが謙信だとは知らなかつたので、謙信をすてて、その家來と戦つたのであります。この時信玄は謙信を見て、

『小僧ツ來やがつたな。』

と、叱りつけましたので、謙信はそれが信玄だとすぐわかりました。で早速、

『卑怯者め、そこ動くなツ。』

と、いひながら、大刀を揮つて信玄に斬りかかりました。その時信玄は胡牀に腰をか
けてゐましたが、

「逃げるものか。」

と、いひながら軍配扇を持つて、その大刀をうけとめました。謙信は馬の上から三度
斬りつけました。信玄はそれがため軍配扇の柄を斬られてしまひ、最後の大刀で肩先
を斬られました。ですから信玄の首は今にも飛びさうになりました。これを見た原虎
昌は驚いて又も槍を揮つて謙信を突きました。けれども甲が堅かつたので中へとはり
ません。そこで馬を穿きました、馬は驚いて駈け出しました。謙信齒ぎりをして残念
がりましたが、もう何ともすることが出来ませんでした。

謙信は行きあたる敵を無二無三に斬りながら自分の陣へかへつてきました。
妻女山へ行つた甲斐の軍は折角行つたが、空洞の陣で、

「やれ出しぬかれた。」

と、急いで川中島の方へ出てきました。来てみると味方は散々の有様で、大將まで傷



川中島の戦

いてゐますので、

『それ撃つてかゝれ。』

と、ここにまた大戦闘が開かれましたが、勝ち勇んでゐた謙信の軍も大分つかれた所へこの新手の敵を迎へましたので、たうとう兵を引かなければならなくなりました。

この戦に越後の兵は三千百七十七人死にました。甲斐の兵は三千二百十六人死にました。そしてはじめは謙信が勝、後は信玄が勝つてやつはり勝負がつかず、どちらも國へかへりました。

武田、上杉は、上田の原で戦つたことが六回、川中島で戦つたことが五回、いつになつても勝負がつきませんので、永祿七年の八月に、戦争は止しにして、兩方から一人づゝの勇士を出して、その二人が戦つて、勝つた方が川中島を取るといふ事にしました。

謙信の方からは長谷川といふ子供の様に丈の小さい勇士が出てきました。信玄の方からは安間といふ仁王様の様に大きな勇士が出てきました。この二人の勝負はほんど

に滑替で無論長谷川の敗と思つておりましたが、二人がとつ組みあつて、仁王さんの方が子供の方を組み伏せましたが、この小人なかくにすばしつこく、組み伏せられながらも、腰刀を抜いて、仁王様の腹をぶつりとさし通しましたので、たうとう信玄の方がまけとなり、川中島は謙信のものとなり、信玄はたゞ海津城だけを自分のものにするといふ事になりました。二人が戦をはじめてから十八年ここで戦が終りました。

戦國時代に英雄、豪傑はたくさんありましたが、この二人の様に立派な考を持ちこの様に上手に戦をした者は他にありませんでした。この二人こそ戦國時代の華といふてよいのであります。そしてこの二人とも京都へ上つて天下に號令しようと考へてゐたのでありましたが、天正元年の四月に信玄は五十三歳でなくなり、謙信は天正六年の三月に四十九歳でなくなりました。この二人の中どちらが京都へ上つても、信長等と面白い戦争があつたであらうに、をしい事には、それが見られませんでした。

- 一 上杉謙信ははじめ長尾景虎といつた。兄のあとをついで越後を従へ勢が盛であつた。
- 二 上杉憲政が北條氏に追はれて景虎をたよつて行つた時景虎はよろこんでこれを承知し、その後度々北條氏と戦つた。それから上杉氏といつた。
- 三 武田信玄は甲斐の人で智謀ふかく、強い大将であつた。
- 四 信濃の村上義清が信玄に追はれて、越後に走つて助けを謙信にたのんだ。
- 五 謙信は義清の頼みに、信玄と信州に戦つた。その中でも川中島の戦は有名である。
- 六 この二人とも京都へ上つて天下に號令しようと考へてゐたが、その志をとげないで、相ついで死んでしまつた。

第三十一 毛利元就

一 なぜ日本の大將にご願はなかつたか

小田原の北條、甲斐の武田、越後の上杉とならんで中國に毛利元就がをりました。毛利氏は代々廣島市から北の方十五六里も行つた所の吉田といふ町に城をもつてをりました。元就のお父さんは弘元といふ人でやはりこの吉田の城にをりました。弘元には長男に興元といふ人がありましたので、その人が家のあとをついで吉田の城主となり、元就はその弟でありましたから、吉田からすこしはなれた所にある猿掛の城

にをりました。ところが兄さんの興元は二十三歳でなくなり、その子があとをつぎましたが、これも五歳でなくなりましたので、猿掛城にゐた元就が、毛利の本家のあとをつぐ事となり、迎へられて吉田の城の主となりました。

元就は小さい時から賢い子でありまして、決してお坊つちやんではありませんでした。

まだ稚い時でありました。そのお守してゐた者が元就を抱いて川を渡つたことがありました。その時お守役が水の中でつるとすべつて、思はず水の中へ倒れました。そのはづみに元就を水の中へ落しました。守役は小さくても大切な主人を水の中へ落したのですから、大變恐れ入つて、

『若様、どうぞお許し下さいませ。』

と、しきりにあやまりました。その時元就は、

『道を歩いてゐてもころぶことがあるよ。川の中だもの尙更あんな事があるよ。心配しなくてもいい。』

と、少しも恐る様子はありませんでした。

またある時の事です。山の吉田から家來たちをつれて嚴島まわりをした事がありました。水に浮ぶ龍宮の様な美しい社殿や、磯近くまで遊びに出て来る鹿のむれなど、元就の眼にも大變面白く、やがてお宮の正面まできまして、元就も手を合せて拜み、家來たちも恭しくおがみしました。さてその歸りかけの事です。元就はニツコリと笑ひながら、お側の家來をふりかへつて、

「おい、お前は神様に何をお願ひしたのだ。」

と、ききますと、主人思ひの忠義な家來は、

「それはもう、若様が吉田の近所ばかりでなく、安藝全體のご領主におなり下さる様お願ひいたしましたのでございます。」

と、返事をしますと、元就は、

「何だ、安藝全體？ 私は「棒程願つて針程かなふ。」といふ事を聞いてゐるよ。だから日本中の主になりたいと願つても大抵は中國地方の主に位しかなれないものだ。」

時によるとそれもどうだかわからないよ。なせ、そんなちつぽけな安藝全體なんかとたのますに、どうか日本全體を治める様にと願はなかつたのだ。」

と、いひましたので、その家來も、きいてゐた他の家來も、元就の大きな考へに驚きました。それが元就の十二歳の時の事であつたといひます。

元就が毛利本家の主となつて吉田の城にかへつた時は二十歳の時で、後奈良天皇の大永三年の事でした。

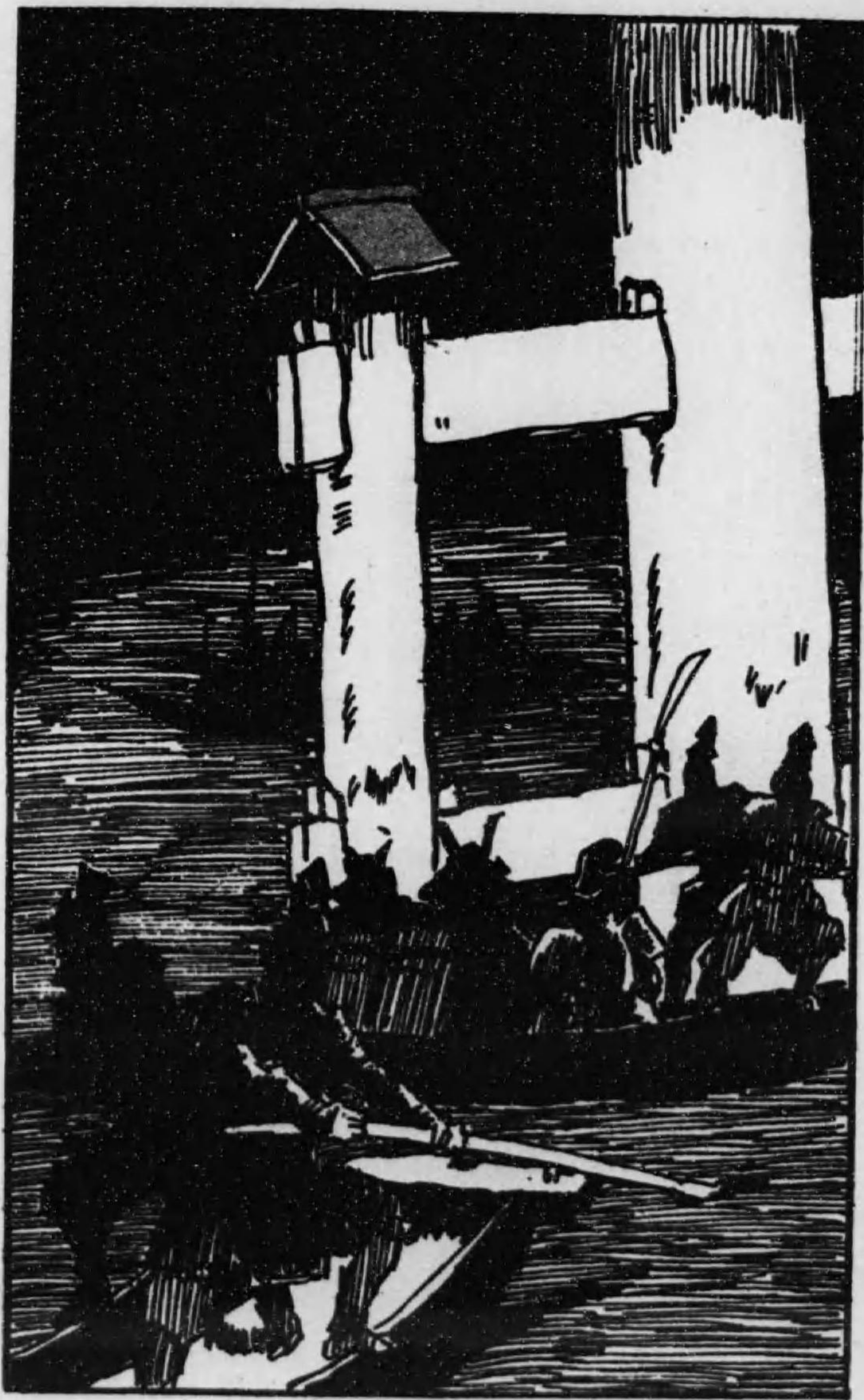
その頃まで毛利氏は決して勢の強い者ではありませんでした。西の方には周防の山口に大内氏がをりました。北の方の出雲の富田城には尼子氏がをりました。大内氏は周防、長門、豊前、筑前、石見、安藝の一部を領し、尼子氏は出雲、隠岐、石見の一部を領して二人とも毛利氏などの及びもつかない勢力のつよいものでありました。ですからこの大名にはさまれた毛利氏は時々あちらからも、こちらからも攻められます。その度毎に、お助けを大内氏にたのんだり、尼子氏にたのんだり、まことにかあいさう有様でありました。

こんな有様でありましたから、元就も考へました。

『この調子であちらの強い者についたり、こちらの強いものについたりしてゐては、今に蝙蝠の様に世の中へ出られなくなつてしまふかも知れない。心を定めてどちらかへついてしまはう。』

と、三十八歳の時に大内氏に従ひました。大内氏に従ふといつては如何にも意氣地のない様であります。大いに延びようと思ふために、一縮みしたのであります。

さて大内氏はその時分、大内義隆が主でありました。義隆は領地の廣い上に、盛に支那の邊と貿易をしてお金もたくさん持つてゐましたので、その城下の山口の町は京大坂につぐ様な繁華な町となり、京都からのがれて来たお公卿さんたちもこの大内氏の所にたくさんをりました。それがためか、後奈良天皇の御即位の費用はこの大内氏が献上いたしました。けれども義隆は強くてお金のあることに慢心を起して、一向兵隊の事などに氣をつけず、詩を作つたり、歌を作つたり、又は茶の湯だ、蹴鞠だと、全くお公卿さんの様になつてゐました。



戦の島殿

こんな有様でありますから、その家來の陶晴賢といふ者が心配をしまして、

「詩も歌も結構でございます。けれども武士であります上からは、弓を射ること、劍を撃つこと、兵を用ふ學問もなさらなくてはなりません。」

と、諫めました。が、義隆は、

「弓を射、劍を撃つのは雑兵のすることであらうぞ。大將には大將のすることがあるのだ。」

と、そのいふ事をききません。晴賢も仕方なく一度は引き下りますが、世の中がたゞ強い者勝ちな様子を見ては、どうしてもそのまゝに捨て置くことが出来ません、またしても義隆の前に出て、

「油断をなさる時ではございません、すぐ近くにも尼子といふ大敵が控えてをります。」

すこしは軍の方にもお氣をつけて下さいます。

と、いひますと、義隆は顔に筋を立て、

『うるさい。又してもよけいなさしで口、二度と出てくることはならぬぞ。』と、叱りつけました。それには晴賢も腹を立てて、

『誰のためにいつてゐると思はれるのか、主人大切と思へばこそ、いやな事までいはねばならないのではないか。こんな主人ではいけない。大内家のために義隆をない者にしよう。』

と、たうとう謀叛を企みました。晴賢も氣のよい人であつたにちがひありませんが、またそれだけ肝癪持ちであつたのであります。

今日も義隆は觀世太夫を呼んで、猿樂をしてあそんでゐました。主人もお客もたゞ楽しく、太夫の手振り足拍子に見とれてゐます時、にはかに館の外の方に、攻め太鼓の音が聞え出しました。

『何事ぞ。』

と、一人の家來が飛び出して様子を見に行きました。そして顔色をかへて駈けもどつてきました。

『殿、一大事でございます。陶晴賢が五千餘の兵をつれて攻め寄せてまゐりました。』と、知らせました。

『ナニ、晴賢が謀叛した？。』

もう猿樂どころの騒ぎではありません、太夫もお客も跣足で飛び出して狼狽はじめました。義隆はやつと寄手を斬りひらいて、そこを逃げ出しましたが、行く所はありません、仕方なく船で九州へ逃げようとしたが、折角漕ぎ出したかと思ふと、大風にあつて、帆は破れ、櫓は倒れて、すこしも進むことは出来ません。仕方なく船を長門國大津郡深川村にあともどりして大寧寺といふ寺に入つて、そこで自殺してしまひました。その死ぬ時になつて、義隆は手紙を元就の所へ送つて、

『私は不幸にも悪い家來のために死なねばならなくなつたが、この仇を取つてくれるものはお前より外にはない。どうかこのあとをたのむ。』と、いつてやりました。

元就はその手紙を見ますと、ハラ／＼と涙をこぼして、

『この様なお手紙がなくとも、晴賢をそのまゝにはしておきません。ましてこの様に
おたのみになつた上はきつと御恨みをはらします。』

と、その場で陶晴賢と戦ふ決心をいたしました。そして兵を集めました。表面では
晴賢につく様な様子をしてゐました。

義隆を亡ぼした晴賢は、義隆の甥を九州から迎へて大内家のあとを取らし、自分は
思ふ通りに大内家をかきまはしてをりました。

さて元就はどうして陶晴賢を討てばよいかと、子の吉川、小早川などをあつめて相
談しました。すると小早川隆景は、

『それは天皇にお願ひをして、晴賢を討つ勅許をいただくのがよろしい。』

と、いひましたので、元就もそれに賛成して、勅許を得ました。これをきいた晴賢は
大いに怒つて、大兵をひきつれて元就を征伐しようとししました。

この時、晴賢の兵は二萬人もをりましたが、元就の兵は四千人にも足りませんでしたし
た。

元就は考へました。

『これでは平地で尋常に戦つては勝算はない、一つ晴賢の大兵をせまい所へ誘ひ出し
て、そこで、勝負をしてやらう。』

と、弘治元年の五月から城を嚴島の宮尾といふ所に築きまして、六月になつて城が出
來上りました。そこで三百人程の兵をこの城に置いて守らせておきました。

二 嚴島の戦

怪しい琵琶法師が元就の所へ出入りしてをります。これは晴賢が元就の様子をさぐ
らせるための間諜でありました。間諜はすつかり琵琶法師になりすまして、勇ましく
も悲しい琵琶の調子に毛利方の將士の心を引きつけてをります。たゞ一人大將の元就
だけはその事を知つてゐました。そして如何にもだまされてゐる様な風をしてゐまし
た。

その夜も法師は涙をさそふ様な物語を琵琶にあはせて語つてゐました。一坐は水を

うった様に静かでした。やがて琵琶が止まりました。その時元就はホツと息をつきながら、

『とりかへしのつかない事をしたわい。みんなの諫めもきかず、嚴島に城を築いたのはやつぱり失敗だった。晴賢にあの城を攻められては、早速に落城してしまふかも知れない。』

と、獨言の様にいひました。そして、

『オ、これは大變なことをいつてしまつた。今の事は誰にもいつてはならないぞ。』と、左右をふりかへりながら口止めをしました。それを聞いた琵琶法師は、鬼の首でも取つたかの様に、急いで晴賢にその事を知らしました。

晴賢は間諜の知らせをききますと、

『よし／＼先づ嚴島を攻めてやらう。』

と、その年の九月に二萬の兵と千艘あまりの船をつれて周防の岩國にまできました。その時晴賢の家來たちは、

『嚴島を攻めるよりは安藝の國にある方の城を攻めた方がよいと思ひます、嚴島に渡ることは危険でございます。』

と、諫めました。が、晴賢はどうしても嚴島を攻めるといひます。丁度その時、毛利方の大將の桂元澄といふ者から手紙がきました。その手紙には、

『あなたが嚴島へお渡りになれば、元就はきつと兵を連れて島の城を援けに行くにちがひありません。その時私はあなたの方について元就の根城をとつてしまひます。』と、かいてあります。これを見た晴賢は、

『それ押し渡れ、勝はこの方のものだ。』

と、嚴島に渡つてしまひました。これをきいた元就はかげでニツコリと笑つてゐました。それもその筈でございます。琵琶法師の前で空とばけていつたことも、桂が晴賢につくと手紙を出したことも、どうかして晴賢を早く嚴島に渡らせたい計略であつたのでございます。

小さい嚴島には今晴賢の兵が身動きも出来ない程一ぱいになつてをります。しかも

宮尾の城は中々落城いたしません。

元就は晴賢の嚴島に渡つたことをききますと、いよく計略があたつて来たぞと出陣の用意をいたしました。

弘治元年十月十日、その夜は風雨の烈しい夜でありました。その烈しい風雨の中を元就は船で嚴島に渡りました。暴風雨に油断をしてゐた晴賢の方は、この大事にすこしも氣がつかまませんでした。

夜の明けるのを待つてゐた元就は軍のまつ先に立つて、

『ソレ討てッ。』

と、高い所から晴賢の陣をめぐらして、なだれ落ちに討つてかゝりました。不意を打たれた晴賢の兵は、戦はうともせずみんな本陣に逃げて集りました。たゞさへ狭い本陣の混雑は何ともいひ様がありません。押されくゝて身動きさへ出来ません。元就はここぞと、

『それ進め。』『それ斬りかゝれ。』

と、少しの猶豫も興へません。

晴賢はもう防ぐことも出来ません。たゞ聲をかざりに、

『追拂へ。』『打ち斥け。』

と、號令をかけてゐますが、味方の兵はその號令をきかうともせず、我先きにと船に飛びのつて、勝手々に逃げてしまひました。

晴賢はふだんからデブ／＼と太つた大將でありまして、急いで歩くことさへ出来ませんでした。それでこの時も人に助けられながらやつと海岸まで來ましたが、もうそこには一艘の小舟も残つてをりません。しかたなくたうとう自殺してしまひました。

この戦に晴賢の方の死んだものが、四千七百八十六人あつたといひます。

元就は晴賢の首を手に入れますと、

『今こそ主人殺しの天罰、思ひ知つたか、それ勝鬨をあげよ。』

と、毛利方は鳥の山々をゆるがす程の大聲をあげて凱歌をあげました。二三日たつて元就は自分の城へかへりました。

翌年の弘治二年に元就は兵を率ゐて、山口を攻めました。大内義長は山口を逃げ出して下の關の北の方の勝山城に入りましたが、そこも元就に攻められて、たうとう自殺してしまいました。大内氏が滅亡びますと今までの大内氏の領分はみんな元就のものとなつてしまいました。それは弘治三年の事でありました。

この年後奈良天皇がおかくれになつて、正親町天皇が御位におつきになりました。

大内氏の亡んだ後、元就は兵を出雲に出して、尼子氏と戦ひました。

尼子氏も山陰の大領主でありますから、容易に破れたものではありませんでしたが、

いつまでたつても根づよい元就の攻撃に、たうとう富田の城をとられて、永祿九年に元就に降参してしまいました。

その永祿の三年に元就が正親町天皇のみ位にお即きになつても、ご費用の足りないため、まだ即位の大禮をおあげにならない事をききまして、

『それは畏れ多い事である。』

と、たくさんのお金を献上してその儀式をおあげたいきました。

元就は元龜二年七十五歳でなくなりました。朝廷では元就の功をおほめになつて、従二位の位を贈られました。明治になつてから、更に正一位を贈られました。元就の死んだ後孫の輝元がその家をつぎましたが、元就の子の吉川元春、小早川隆景等は力をあはせて、毛利の家を扶けましたので、毛利氏はいつまでも榮えて今にまで立派な家柄として残つてゐるのであります。

- 一 毛利元就(もとよし)は安藝(あき)の人(ひと)で大江(おほえ)匡房(むねむね)の子孫(こそん)である。
- 二 小さい時(とき)から賢(かしこ)く、その嚴島(いづくしま)に參詣(まぎ)した時(とき)、なぜ天下(てんか)を平(たい)げさせ給(たま)へと祈(いの)らなかつたか)と家來(けらい)たち
にいつた程(ほど)の人(ひと)であつた。
- 三 元就(もとよし)は大内氏(おほうち)に從(したが)つてゐたが、大内義隆(おほうちよしたか)がその臣陶晴賢(しんすゑはるかた)に亡(ほろ)ぼされた時(とき)、元就(もとよし)は晴賢(はるかた)を嚴島(いづくしま)に討(う)つてこれを亡(ほろ)ぼした。大内氏(おほうち)の領地(りやうぢ)を自分(じぶん)のものとした。
- 四 後尼子氏(のちあまこし)を亡(ほろ)ぼして、中國(ちゆうごく)九州十餘國(きゆうしゅうじゆこく)を領(りやう)した。
- 五 正親町(おまぎまち)天皇(てんのう)の御位(みくらゐ)の御費用(ごひよう)を奉(たご)つて忠義(ちゆうぎ)をつくした。
- 六 元就(もとよし)には隆元(たかもと)吉川(きつか)元春(もとはる)、小早川(こはやが)隆景(たかかげ)の三人(にん)の子(こ)があつた。
- 七 隆元(たかもと)は早く死(し)んで輝元(てるもと)がそのあとをついだが、元春(もとはる)、隆景(たかかげ)は心を一つにして毛利(もうり)の家(いへ)をまもつたので
毛利(もうり)はながくつづいた。

第三十二 後奈良天皇

一 蚊帳の衣

應仁(おうにん)の亂(らん)から後(のち)の幕府(はくふ)の有様(ありさま)はたゞ名(な)ばかり、管領(くわんりやう)の細川氏(ほとかはし)が將軍(しやうげん)よりも勢(いきほひ)がつよかつたのであります。その細川氏(ほとかはし)もだん／＼と衰(おとろ)へて、その家來(けらい)の三好氏(みよし)の方が勢(いきほひ)が盛(さかん)となり、三好長慶(みよしちやうけい)といふものなどが幕府(はくふ)の權利(けんり)を自分(じぶん)勝手にしてゐたことさへありました。ところが長慶(ちやうけい)が死(し)んだ後(のち)はその家來(けらい)の松永久秀(まつながひさひで)の勢(いきほひ)が盛(さかん)となり、この久秀(ひさひで)は將軍義輝(しやうげんよしかず)を殺(ころ)してしまつた程(ほど)の無道(むだう)を働(はたら)いてをりました。ですから幕府(はくふ)の勢(いきほひ)な

どはすつかりなくなつて、その勢のないのにつけこんで、近所の勢のある大名たちは幕府の領地を取つてしまひ、おとなしい公卿の領地も自分のものにしてしまひ、はては皇室の御料地までも横取してしまつて、公卿の人たちは都にゐることも出来ず、朝廷のご用もつとめず、めい／＼自分の知つてゐる大名をたよつて、方々へ出て行つた人もたくさんありました。大内義隆の滅亡んだ時などは、この京都から來てゐた公卿さんがたくさんゐられたのであります。

こんな有様でありましたから朝廷の御不自由は申し上げるさへ畏れ多い御有様で、後土御門天皇のおかくれになつた時は、御葬式の費用がございませぬのでお葬もしないで、御棺のまゝで四十日も御所の中にお置き申し上げてありました。

又次の後柏原天皇がご即位になつた時も、即位の大禮をおあげになることは出来ず、二十一年も後になつて、やつと本願寺からお上げしたお金でその儀式をおあげになりました。

後奈良天皇の御即位の時も、十年もたつたあとで大内義隆と、本願寺との献上した

お金でその儀式をお上げになりました。

正親町天皇の御位におつきになつた時も、前にもいひました通り、三年の後になつて毛利元就のお上げしたお金で即位の大禮をおあげになりました。

たゞご大禮やご大葬に、ご費用のお足りでなかつたばかりではありません。ごふだんの御料にもおこまりになることが度々で、天皇様のおかきになつたお歌などをいただいた者が、御禮に差し上げたお金がそのお費用になつた事さへありました。まことに申し上げるさへ涙のこぼれる程、かなしくなげかはいしい、御有様でありました。

従つて御所の修理などは何十年の間そのまゝになつてゐたかわかりませぬ。垣根はくづれ、御所の壁は落ちて、賢所の御燈明が遠く三條の橋の上から拜まれたといふ話であります。その垣根の破れた御所へは、近所の子供がいつも遊びにまゐりました。子供たちは大庭に遊びつかれると、ご殿へ上つてその落ちちらばつてゐる壁土で人形を作つてあそんだりしました。そればかりではありません、紫宸殿の前の橘の樹や櫻の木の下には皴のよつた爺さんや、婆さんが茶店を出して、旅人を休ませたりして

をりました。

朝廷の御様子^{てうていごやうす}がこれでありますから、京に残つてゐる公卿の人たちは、何か仕事をなさらなければたべて行くことが出来ません。けれどもお公卿さんに出来る仕事^{しごと}がたくさんあるわけではありません、食べることに、着ることに、まづつてゐられませんでした。

或る夏の事^{あるなつこと}でありました。用事^{ようじ}があつて、常磐井^{とこはな}といふお公卿^{くけ}さんを訪ねて行つた人^{ひと}がありました。面會^{めんかい}をたのみますと、取次^{とりつぎ}の者^{もの}が、

『夏の衣裳^{なついしやう}もおもちにならないので、お逢ひするのは失禮^{しつれい}であるとおいひでございませす。』

と、いひますので、その人^{ひと}は、

『決してそんな御心配^{ごしんぱい}には及びません、たゞお目^めにかゝればよいのございませす。』
と、強ひて面會^{めんかい}しました。ところが座敷へ通つてはじめて驚^{おどろ}きました。主人^{しゅじん}は裸^{はだか}の上^{うへ}に蚊帳^{かや}を纏^{まと}つてそこにゐられるので、主人^{しゅじん}も客^{きやく}もいひ様の^{やう}ない、さまりの悪い思^{おも}ひをし



御所の荒廢

たといふことでもあります。

二 御聖徳

世の中は麻の様にみだれ、朝廷の窮乏はこの上もない程でありましたにもかゝらず、後奈良天皇はたゞ人民のためにみ心をおつかひ下さいました。

天皇は學問をお好みになり、どんな難儀にお逢ひになつても少しもお心を落されることなく、幕府がどんなに無法なことをしようとも、人民が武士のあることを知つて朝廷のあることを知らないでゐようとも、天皇はその不心得の民のために、み心をおつかひになり、悪い病のために人民のなやまされるのをご覽になると、丁度母が我が子の病氣に寝たり食べたりすることを忘れてまでも看病する様に、神様や、佛様に、「早くよくなる様に。」とお祈り下さいました。

二十年目毎にお立てかへする伊勢の神宮も、人民は戦のために、自分の勢さへつよくすれば人の事はどうでもよい。神も佛も何になるものかと、たてかへしようとも

しない時、天皇はこの我儘な人民のために、その罪を天皇御自身の罪であるかの様にわざ／＼伊勢へ勅使をおたてになつて、そのおわびをして下さいました。

毛利元就が主人のために陶晴賢を討ちたいとお願ひしたのもこの天皇の時の事でありました。天皇は元就が忠義のために戦を起すことをおききになると、その心に感心せられてすぐに勅をお下しになりました。

天皇の御代ポルトガル人が大隅の種子ヶ島に漂着いたしました。その時その船につてゐた者の中に鐵砲を持つてゐたものがありました。島主種ヶ島時堯は清定といふものにいひつけてその鐵砲のつくり方を習はせました。日本の國に鐵砲の傳はつたのはこれがはじめてでありました。

この様に天皇の御代になりましたから、西洋の人々が、東洋の方面にたくさん出て來まして日本の國へも自然外國人が來る様になりました。國內は亂れに亂れてゐる時、かうして外國人が我國の近をうかがひまはりはじめたのであります。その時、この様に徳のお高い天皇がおいて下さつた事は、この上もない幸な事でありました。

日本の國は誰がどんな無道をいたしましても、誰が政治の權力を自分のものにしようとしても、いつもそれについてご心配して下さい下さるのは天皇であられます。これを考へましても私共は、皇室に對しておつくしせねばならないことを深く心にきざみこんでゐなければなりません。

後奈良天皇は弘治三年九月に御崩御になりました。御年は六十二歳、御位にある間は三十一年でありました。享祿、天文、弘治はこの天皇の御代の年號であります。御陵は山城の深草にございまして、深草法華堂の陵と申し上げます。

- 一 戦國時代は朝廷の御威光がまことに衰へ、日日の御料にもこまられる有様であつた。
- 二 それがため公卿たちは地方の大名をたよつて京都を出て行き、京都に止まつてゐる人々は着る着物もない位であつた。
- 三 ある人か一人の公卿をたづねた時、その公卿は蚊帳をからだにまいて出てきたといふ事である。
- 四 後奈良天皇はこの時におありになつて、朝廷の儀式をおこされ、伊勢神宮の造營にご心配あそばされ、いつも人民をおあはれみ下さつた。
- 五 ある年悪病の流行した時天皇はおみづからお詔をおかきになつて、病のなほることをお祈り下さつた。

大正十一年十二月五日印刷
 大正十一年十二月初版發行

趣味の小學國史
 尋常五學年下巻
 定價金貳圓拾錢

版權所有



著者 桂田金造
 發行所 近藤彌壽太
 印刷所 東京市牛込區築地町十九番地 平山泉
 製本所 東京市神田區今川小路二丁目一番地 山縣製本所

東京市京東區區築地町九十番地
 文教書院印刷部

發行所
 東京市牛込區赤城町三十四番地 大坂實文館
 盛文館
 六合館
 至誠堂
 大阪屋號
 大阪實文館
 東海堂
 北陸館
 上田屋
 益文堂

505
52

終